

書評編集委員会

1990.6.30
第92号

書評



末広重雄の朝鮮自治論

——内藤湖南を念頭において——

西 重信 4

おいてけぼり——宮本輝試論 IV——

芝田 啓司 10

連載

在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート XII

日本の労働者・市民の連帯……………梁 永厚 25

ロマン主義文学論序説——その一二

小説のなかの異境……………池田 浩士 43

研究余滴 象徴主義 I

序章 象徴主義は死んでいない……………山村 嘉己 53

日本中国ことばの来往ゆきまき (37)……………芝田 稔 60

短評

同時代を撃つ PART 3 66

出ようかニッポン 女31歳 68

精神病を知る本 70

羅針盤 2

お知らせ 72

編集後記

題字 網干善教(文学部教員)

1990.6 羅 針 盤



去る五月二十四日、韓国大統領盧泰愚が来日した。この盧泰愚来日をめぐっては、マスコミなどでも多く取り上げられ賛否両論行われてきた。主な内容としては、戦時中における日本の侵略行為に対する政府側の見解、或は、クローズアップされているアキヒトの「お言葉」についてであった。特に「お言葉」問題については、昭和天皇ヒロヒトが八四年に、当時の韓国大統領全斗煥との会見での「お言葉」との絡みもあって今回注目されていた。

ヒロヒトは全斗煥との会見の中で、「今世紀の一時期において両国の間に不幸な過去が存したことは誠に遺憾であり、再び繰り返されてはならないと思います」という発言であった。今回、アキヒトは「我が国によってもたらされた不幸な時期、貴国の人々の苦しみを思い、痛惜の念を禁じえません」という発言をしている。それに対し盧泰愚は、「反省したことに対し深く敬意を表する、との感想を述べている。特に「痛惜」という言葉を使ったことに対してかなりの評価をしているようだが……。

果たして本質的な問題として、数行の「お言葉」を読み上げただけで済まされるものであろうか。過去に天皇の名のもとに朝鮮侵略が行われ、朝鮮民衆の言葉を奪い、名前を日本的なものにする創氏改名を行い、指紋をとり、

日本への朝鮮人強制連行までも行い、過酷な労働を負わせたのだ。そのような過去の事実が存在しているにもかかわらず、天皇或は国家は、実際上は反省せず、言葉の問題として解消しようとしている。具体的には、現在でも在日朝鮮・韓国人に入国管理法、外国人登録法で彼らを管理し、指紋もとりに続けている。又、就職差別、結婚差別等が存在し未だに在日朝鮮・韓国人を治安・管理の対象とした戦時中の日本帝国主義の影をおとしている。

つまり、盧泰愚が来てアキヒトと会見し、「日韓新時代」
「二十一世紀に向けて真の同伴者の関係をつくりたい」
云々、といったものは現存する差別、或は過去の日帝支配を未解決のまま覆い隠しているこうとするものに他ならない。それは、盧泰愚が訪日するにあたって、韓国内において、学生を中心として反対運動が盛り上ったことを見ても明らかである。

ここ、関大においても、民族サークルの学友が「盧泰愚来日阻止」を叫び、図書館前で四十八時間のハンスト闘争に決起した。恐らく読者もその様子は目にしていることだろう。やはり、そこで我々日本人は、在日朝鮮・韓国人を共存していく存在として、歴史的経緯等を深く認識せざるを得ないだろう。つまり、朝鮮等アジア侵略したことをしっかり認識し、戦後もその侵略を反省せず、

在日朝鮮・韓国人を治安・管理の対象としてきた。そういう現状には責任を持って当然である。もちろん、今回のハンスト闘争をも他人事として捉えられるはずがない。

「協定三世」の法的地位・待遇改善、在韓被爆者支援というかたちで、現象面を追っていけば在日をとりにまく情況は確かに「改善」されてきたかもしれない。もちろんそれは運動の成果とも言えるし評価できるものである。しかしながら、そういったことを通じて我々日本人が考えなければならぬことは、どうして在日朝鮮・韓国人が存在しているのかということである。

今回の盧泰愚来日を通じて、ヒロヒト、政財界関係者と盧泰愚が会って握手を交わすことを我々日本人一人一人がどう考えていくのか、問われているといえるだろう。

末広重雄の朝鮮自治論

——内藤湖南を念頭において——

西 重 信

朝鮮における一九一九年（大正八年）の三・一運動は、それ迄の日本の統治政策を根本から揺がした。それに伴って、日本ではいくつかの注目すべき論評が発表されている。まず内藤湖南の統治論がある⁽¹⁾。湖南の主張を一言で表わせば、初代総督寺内正毅の武断統治の継続である。その根拠は、いわゆる「併合の精神」にある。つまり、日本は国家自衛のために朝鮮を併合せざるをえなかったというものである。そこでは、外国勢力を朝鮮に引き入れる要因としての事大主義に対するきわめて強い警戒が示されている。三・一運動についても例外ではない。今度は清国やロシアにかわる米国である。だから武力に

よって朝鮮を支配していかなくてはならないという考え方である。

しかし、湖南とは全く異なる考え方があったことを見逃してはならない。すなわち、日本のためにはむしろ朝鮮に自治を認めるべきであるという主張である。この朝鮮自治論は、はからずも湖南と同じく京都大学の中からでた。末広重雄「朝鮮自治問題」である⁽²⁾。この小論では、湖南を念頭において末広をみてみたい。

注

(1) 三・一運動に対する湖南の見解については、拙稿「内

藤湖南の朝鮮統治論(三三)(本誌、第八九号)を参照されたい。

(2) 末広重雄は鉄腸(重恭)の長男。法学博士。「朝鮮自治問題」は三・一運動直後の六月一四日稿で、『太陽』(第二五卷、第九号)に発表された。なお末広については、高崎宗司「日本人の朝鮮統治批判論」(『三千里』第三四号)がある。

一、統治方針の誤まり

末広は三・一運動について、統治方針を誤まればアジアでも第二の 아일랜드 問題が生じるであろうという彼自身の予言が的中したと述べている⁽¹⁾。すでに併合直後から危惧していたのであろう。従つて末広にしてみれば、米国宣教師の煽動説や天道教主孫秉熙の陰謀説を、三・一運動の根本原因ではないとしたのは当然である。そこで彼は、併合以来の統治を振り返っている。最初にとり上げているのが一〇年間の統治の積極的側面である。腐敗しきっていた司法、行政の刷新、教育機関の充実、交通機関と衛生状態の改善、農商工業の漸次発達などである。しかし、それにもかかわらず朝鮮人が蜂起したのはなぜか。末広の眼はこの点に注がれている。そして、いくつかの原因をあげている。

第一は、軍人支配である。末広は「現代政治の何ものたるを解せず、天下はサアベルを以て治む可し」と考えている軍人による統治は、実に大きな時代錯誤であるという⁽²⁾。この軍人総督の下で朝鮮人は、参政権はいうまでもなく言語、著作、出版、結社の自由をはなはだしく制限されてきた。ところが、日本の統治下で朝鮮人は多大の物質的進歩を遂げた。物質的進歩は精神的自由を要望する。ここでは植民地本国の統治は結果として植民地に自由への欲求をもたらすという支配の矛盾が、はつきりと指摘されている。

第二は、民族差別である。末広は、これを「よぼ的待遇」と表現している⁽³⁾。日本人は白人に向つては人種差別的撤廃を訴えながら、朝鮮人や中国人を劣等民族扱いする。実にこつけいの限りであるという。彼は、日本の朝鮮統治と欧米諸国の植民地統治とを比較しながら説明している。例えば英国のインド支配をかかげて、ロシア革命前のツァー以上の専制抑圧であり、英国人はインド人を家畜同様に取り扱っていると断じる。第一次大戦をデモクラシーと正義人道のための戦争だと称する英国は、「天下第一の偽善者」である⁽⁴⁾。これに比べれば、日本政府と日本人の朝鮮人に対する態度は、必ずしも非文明的、非人道的であるとはいえない。さかんに日本の朝鮮

統治を非難する米国は、まず先に英国の非文明的なインド統治こそを責めるべきであるという。だが末広は、英国のインド統治をもちだして日本を弁護しているのではない。いかにひいき眼に見ても日本の統治は善政ではないし、かりにそうだったとしても朝鮮人は反感を抱くに違いないという。なぜなら、第一次大戦以後の世界的大思潮に朝鮮人が無関心ではなかったからである。これが三つめの原因である。デモクラシーと小国民の自由独立のための戦争というキャッチフレーズが勝者の偽善であったとしても、それが世界の被抑圧国に大きな影響を及ぼしたことは事実である。朝鮮人も日本の支配を脱して、分離独立、少なくとも自治を得ようとするのは当然のことである。末広の同化政策批判は、このような認識からでてくる。

注

- (1) 前掲『太陽』、七四頁。末広は、併合後の一九二二年に「朝鮮総督政治」(『太陽』第一八巻、第一号)を発表している。しかし、そこではこのような予言は見当らない。

- (2) 前掲『太陽』、七五頁。
(3) 同上、七五頁。

- (4) 同上、七六頁。

二、同化政策批判

末広は、世界に民族主義が勃興して以後、欧米諸国の植民地においても同化政策が成功した例は皆無であるとしている¹⁾。フランスはアルジェリアとインドシナで失敗し、英国はインドで困難をきわめている。オランダと米国はいち早く同化政策そのものを断念してしまった。それにもかかわらず、日本の同化政策論者は次のように言っている。すなわち、欧米諸国が植民地の同化に失敗したのは、人種、思想、風俗、習慣が余りに異なっていたからである。だが日本と朝鮮とは人種と思想を同じくし、風俗や習慣にも大差はない。だから欧米の場合と同列に比較することはできない。これに対して末広は自問自答する。では人種、思想、風俗、習慣が同じである欧州人相互の間では同化政策の成功例があるのかと。ピスマルク時代のプロシヤによるポーランドへのドイツ語の強制とポーランド語の厳禁。ドイツのアルサス、ローレンに対する同化政策。ロシアのポーランドへの同化政策。これらはいずれも失敗に終わってしまったばかりか、ポーランド人の反感は次第に熾烈となり、戦争を機会に連合国の同情を得て祖国を再建したではないか。さらに、オ

イストリアでは国内での同化にさえ失敗している。政治的優位を占めてきたドイツ人とマジアル人（ハンガリー人）は、国内のポーランド人、スロヴァキア人、南スラブ人、ルーマニア人、イタリア人を同化させようとしてきた。戦争でのオーストリアの敗北は、実はこれらの被抑圧者の民族運動のしわざに他ならなかった。

そして末広は、日本の朝鮮に対する同化政策も同様であると述べている。なぜなら朝鮮は二千年の歴史を有し、日本よりもはるかに高度の文明を誇ったからである。それは中国文明からの借り物であったが、借り物といえども日本文明もまた中国から借用したに過ぎない⁽²⁾。つまり日本人が必ずしも優等民族ではないし、朝鮮人が必ずしも劣等民族なのではない。日本語を強制したからといって朝鮮人を同化できる筈はないといっているのである。彼は、これを「純日本々位の政策」の失敗といっている⁽³⁾。

末広の同化政策批判は、同時に日鮮同祖論と朝鮮文明停滞論への批判でもあった⁽⁴⁾。

注

- (1) 前掲「太陽」、七七―七八頁。
- (2) いうまでもなくこのような歴史観は誤りである。
- (3) 前掲「太陽」、七九頁。

(4) 湖南の同祖論と停滞論については、拙稿「内藤湖南の朝鮮観」（本誌、第八〇号）を参照されたい。

三、朝鮮自治論

末広の朝鮮自治論は、いわば段階的独立論である。だがいいかえれば、即時独立を認めよとは言わなかつた点に注意すべきである。

最初に末広は、「今日欧州の諸民族は自己民族に依る自己民族の為の政治を要求して居る」としてアイルランドと南スラブをあげている⁽¹⁾。そして、この思想は欧州以外にも波及しつつあり、エジプト、インド、インドシナの民族運動を例にあげる。この欧州に源を發する一大思潮が東漸して朝鮮にも及んだとみるのが末広のとらえ方であろう。一見すれば、国際連盟とウイルソンの民族自決宣言への期待と受け取ることができる。しかし、末広はこれを明確に否定する。まず、国際連盟が成立し世界は正義人道の支配下に入ったという見方について、連盟には永久平和を保障するという名はあっても実がないと退ける。さらに、ウイルソン大統領は自らを正義人道の擁護者というけれども、全くの「食わせ者」であると酷評する⁽²⁾。末広からみれば、世界は依然として「物騒な時代」なのである⁽³⁾。朝鮮の即時独立という欲求に断



固として反対する姿勢はここからでている。末広は次のように言っている。

「今日朝鮮人に独立を許したならば、極東は日清戦争前の状態に復する所があつて、朝鮮併合の趣意を没却し去るものであるから、斯かる朝鮮人の要求は、飽くまで排斥せねばならぬ」⁽⁴⁾。

しかし、続けて次のようにも言う。

「然し又我國の安全を確保する為には、朝鮮人の希望を全然無視することも宜しく無い。(中略)純日本本位でもなく、さりとて又純朝鮮本位でもなく、其の中間にありて、朝鮮に自治を許すことが最善の策であると堅く信ずるのである」⁽⁵⁾。」

末広の自治論には、あく迄も日本の安全を確保するためという根拠があつた。彼は、英国とアイルランドとの關係を例にあげて説明している。すなわち、英国はアイルランドの要求を無視して自治を与えなかつた。このために従來の穩健な勢力にかわつて、過激な独立派であるシン・フェイン党が力を得たのである。第一次大戦中、彼らはドイツと結んで英国を危機に陥れようとした⁽⁶⁾。この実例を日本は看過すべきではない。従つて、朝鮮問題の解決には自治を認める以外にはないということになる。

ここで末広は日本の安全ということをも二つの側面からとらえていることがわかる。一つは、朝鮮が他の強国の支配下に入ることを恐れたことである。つまり外からの脅威である。二つめは、植民地の反乱が本国自身の危機を招くことである。いわば国内からの崩壊である。朝鮮自治論は、この二つの問題に同時に対処しようとした切実案といえよう。

自治論を展開する一方で末広は、一たび自治を許せば次には独立を欲求するに違いないという自治反対論にも答えている。彼は次のように言う。

「予の観るところに依れば、朝鮮人が自治の結果、政治的訓練を経て、独立の能力が十分に出来た場合に、全

民族挙つて独立を要望するならば、其の独立を許しても差支無いではないか。否許することが寧ろ我國の利益となるのではないか⁽⁷⁾。

自治を経ての段階的独立論である。ここでいわれている「独立の能力」とは、日清戦争前に即して言えば、朝鮮独自で清国やロシアに対抗できる政治的実力ということになる。植民地朝鮮ではなく独立国朝鮮の存在の方が、ひいては日本の利益となるという考え方である。

注

- (1) 前掲『太陽』、七九頁。
- (2) 同上、七九頁。
- (3) 同上、七九頁。
- (4) 同上、七九頁。
- (5) 同上、七九頁。
- (6) 一九一六年のイースターの反乱の前後に、アイルランドにドイツ軍を導入しようとして捕えられたサー・ロージャー・ケースメントの事件をさすと思われる。シン・フェイン主義とは異なり、敵の敵は味方という考え方である。しかし、彼の法廷での弁論はアイルランドにすばらしい勇気を与えたといわれている。アジアでは、インドのチャンドラ・ボース

の例がある。

- (7) 前掲『太陽』、八〇頁。

末広と湖南は、今世紀初頭のアジアで日本の安全を確保しようという共通の立場に立っていた。さらに、そのためには朝鮮を切り離して考えることはできないという認識も同じである。その意味で両者とも脱亜論者ではなかった。だが朝鮮統治に関しては、自治を主張した末広に対して湖南はあく迄も力で支配しようとした。両者の隔たりを検討することは筆者の今後の課題である。

重要な問題がもう一つある。末広のいう段階的独立についてである。日本人にとつてはきわめて現実的、具体的提言であつたのかも知れない。だが朝鮮人にとつては容易に納得できなかったことはいままでもない。朝鮮人に限らず全ての被抑圧民族にとつては、即時無条件独立以外に考えられなかったことは当然である。しかし、ひるがえつて考えられると一九四五年以前において数々の独立運動にもかかわらず独立を与えられた植民地は例を見ない。独立とは与えられるものではなく勝ち取るものであるというインド独立運動の教訓は、我々にとつて今日でも貴重な教えである。

(に)し かげのぶ・本学経済学部卒業生

おいてけぼり

— 宮本輝試論 IV —

芝田啓治

六、"おいてけぼり" 一体感の崩壊

"Boys be ambitious!" の言葉は、札幌農学校を去るクラーク博士が若き教え子達に贈る言葉として残していったものである。博士の教えやこの言葉に触れた若者が大きな影響を受け活躍したのも事実である。しかし、彼の真意を本当にその後の日本人は理解し得たのであろうか。「大志を抱け」という有名なあの言葉がその後一人歩きを始め、当時及びその後の日本の歩みと歩調を合せ、如何にも立身出世主義的な教訓として受け止められたのではないだろうか。「大志を抱く」のは、何のため、

誰のためという大切な箇所が抜けているのである。

明治四十五年間は、一面では条約改正交渉に費やし、一日も早く欧米列強と同じ土俵に立てる日を願いつつ、時には無理をしていたのであろう。「身を立て、名をあげ、やよ励めよ」と巣立っていく若者の歌が聞こえて来るように思われる。国権論が様々な思想家・政治家によつて叫ばれたのもこの時期である。

"Boys be ambitious!" の言葉の後に、クラーク博士は明確に "for God" と付けていた。「神のために」という語が何日の間にか欠落したのである。「神のために」「大志を抱く」のであって、決して自らのためにのみ「大志

を抱け”と言ったものではないのである。この“ゝのた
めに”というのは、その時代・思想・宗教等によつて、
如何ようにも付け足されるのであるが、戦前・戦中の日
本のように“国のため”とか“天皇のため”とかが強調
された時代もあった。そこでは、滅私奉公が叫ばれてい
たのである。しかし、人々はその戦争が終つてからは、
“ゝのために”尽くすという事に裏切られたショックの
ためか、この“ゝのために”という言葉を使う事に、又
使われる事に少々臆病になつてゐるきらいがある。“恵
まれない子供のために”と言われても直ぐには素直に反
応出来ないし、“飢えに苦しむアフリカ人のために”と
呼び掛けられても身体はなかなか動き出そうとはしない
のである。少し眉に唾を付けないと、ひよつとしたら馬
鹿を見るのではないかと疑つてしまふのである。“ゝの
ために”と言われても、又その声が大きければ大きい程、
確信を持つて言われれば言われる程、何故か精神状態が
穏やかならない所に陥つてしまうのである。いや、もと
もと正面で受け止めようとはせず、はぐらかしたり、し
らけてみたりするのである。今更“for God”と付け加え
られたとしても、何をどのようにしていいのか暗中模索
の状態となり、困り果ててしまうだけである。“神のみ
むねに従い”自分のためだけでない“大志”を抱き、自

らを發揮する方法はそう簡単には見出せない。殊に、信
仰のない者はたちまち何が“神のため”かと思うだろう
し、よしんば信仰がなく、正面から受け止めようと考え
たとしても、自分以外の人のために自分がどのような働
きが成せるかというのは、やはり難問中の難問と思われ
る。巡り巡つて、*for me*に戻つて来るのではあるまいか。
それが二十世紀後半の現実なのであろう。そして、これ
なら安心出来るし、裏切られる事も又他よりは少ないの
ではあるまいか。たとえ自己に裏切られたとしても、そ
れはそれで納得出来るし、誰をも恨めないものである。結
局“他者のために”自らを犠牲にするなどとは笑止千万
の事として映り、逆に他者を犠牲にしても“自分自身
のために”と考え、行動してゐるといった現実もあろう。
二十世紀後半の変化が如実に表れているのが、女性の
生き方ではあるまいか。戦前・戦後を比較しての隔絶感
が最も明確なように思われるので、その辺りを追つてみ
たい。

封建時代、女性は“女、三界に家なし”と言われ、幼
ない時は親に従い、嫁しては夫に従い、老いては子に従
うものとされてきた。女性の人生は、“家のため”“夫の
ため”“子のため”に生き続け、自分を抑え、又自分を
殺して、人に尽して生きていくのが女性の道とされてい



た。そして、女性は犠牲になる事があったとしても、それを美德として受け止め、自分の人生の中でひたむきに生き抜く強さを育んでいったのであろう。良妻賢母と呼ばれる事を励みとして、山内一豊や華岡清州の妻の如く、ひたすら女としての生き方を抑えていたのである。そして、遂には女としての幸福感も良妻賢母の位置に一体化させ、ただ己を無にする飽くなき戦いに挑んでいたのがあった。しかし、戦後その一本化が脆くも崩壊の憂き目に会おうとしている。それは価値感の多様化、「子より親が大事」(太宰治「桜桃」)、主婦の外^まさま化、更には妻や母より女としての生き方が優先される事から起こる

のであろうか。殊に、中年主婦の実態たるや恐しいものがあると聞く。このように、かつて「女・妻・母」なるものの一体化が当り前として通って来た生き方が、今や崩壊の危機に直面しており、不安定な女性を生み出しているのではあるまいか。

例えば、身勝手な男に「おいてけぼり」を喰った女。又、自ら女としての自覚を失ってしまった、世に言う「オバタリアン」となってしまった女(もちろん、その中には若い女性もいるようだが)。

夫から「おいてけぼり」を喰った妻。働き蜂の人生同伴者としては、やはり味気ないものである。如何に家庭や家族のために働いているとは言え、「五時まで男」なら、疲労のピークで家に辿り着き、夏は「ビール・枝豆・一口野球」、冬は「熱燗・湯豆腐・電気毛布」の三点セットでさっさと自分の世界に転がり込んでいく。又、「五時から男」なら、接待・付合いにと多忙で家庭・家族の外に在るといった具合で、どちらにせよ家庭での存在感が希薄になって来ているのではないだろうか。以前のよう、妻もただ三ツ指ついて待っている訳にはいかぬと考へ始めたのであろう。

又、頼りにしていた子供達も、俄然中学生や高校生ともなれば一人歩きを始め、今まで母の手のひらで遊んで

いたかと思つていたら、突然反撃し出し、何の事やら訳の判らないうちに子から「おいてけぼり」を喰うのである。母はうろたえ、頼りにならない夫に相談しても、合点がいらず、「昔は……」「俺らの頃は……」「最近の子は……」と要領得ない答えばかり。譬え怒りをぶちまけ男らしい所を見せたとしても続かず、結局は子と妥協。

いい所ばっかりとつて、後は母親に任せるとか。

「女はつらいよ」と叫んでみても、一向に解決出来ず、苦しみを紛らわせたり、苛立たしさを処理出来ず自暴自棄に陥る事もあるであろう。しかし、それでも解決出来ないと思えば、人はじっと耐え直すしか道はないであろうか。このような難問を解く力などないが、宮本輝やその他作家の言葉の中から一つの道を探ってみたいと思う。

(1) 女（例外はあるという大前提で）

「人間は、恋と革命のために生まれて来たのだ」（太宰治「斜陽」）

この言葉の中に戦後の女性の新しい生き方が示されている。没落していく元華族の娘が子が、父が死に、母が死に、そしてやっと復員してきた弟直治までもが自殺するといった状況の中で、新たな道を見出し、一人力

強く生きていこうと決意した時の言葉である。個人的には、恋に燃えつきる。しかし、その恋は今までの恋とは決定的に違い、一人称と二人称の間の問題に終わる事なく、三人称を包含するのである。そして、その三人称とは、世間の事であり、社会の事であつて、その保守的なものへのかず子の挑戦なのである。

「こひしい人の子を生み、育てる事が、私の道徳革命の完成なのでございます。」（同）

「私生児と、その母

けれども私たちは、古い道徳とどこまでも争い、太陽のやうに生きるつもりです。」（同）

「革命は、まだ、ちっとも何も、行われてゐないんです。もつと、もつといくつもの惜しい貴い犠牲が必要のやうでございます。」（同）と結論付けていくのである。かず子は、妻の座を獲得する事が出来ずとも、女として母として生きていこうと一大決心をしたのであつた。

又、かず子はこのようにも言う。

「私はこの相談は、これまでの『女大学』の立場から見ると、非常にずるくて、けがらはしくて、悪質の犯罪でさへあるかも知れません……」と。戦前なら到底許されようのない女性としての生き方を、貴族の娘としての生き方を敢てかず子は選択したのであつた。

太宰は、かず子を通して戦後の新しい女性像に挑んでいるといつてよいのではないだろうか。強く、かつ、たおやかな女としての生き方を追求しようとしているのである。

それでは、何故太宰治がこのような新しい女性を求めたのか。その一つの答えとしては、彼自身の生活の中では女性というものの実感がひよっとしたら持ち得なかつたためではないだろうか。彼の生いたちを見ていくと様々な「おいてけぼり」に出喰わしている。母親の手によつて育てられなかつたという体験、乳母さよとの別れ、女中たりとの別れと重ねることにより、いわゆる女性コンプレックスに陥つたのではないだろうか。このような原体験を通して、太宰は女性との擦れ違い、掴みきれないもどかしさを常感じていたのではないだろうか。又、太宰は一方で女性に頼りきり、甘え、我儘放題の私生活であつたといえよう。

「しかし、お前は強いなあ……。負けた、負けた、僕は負けたよ。お前たちのこんな強さは、いったい、何から来てゐるのだらうなあ。男女同権どころぢやない。これじゃ、あべこべに男のはうからお助けを乞はなくちゃいけねえ」(太宰治「春の枯葉」)

「有史以前から、お前たちには、そんな強さがあつた

んだ。さうしてまた、これから、この地球に人類の存在するかぎり、いや、動物の存在するかぎり、お前たちは永久に強いんだ」(同)と言っている。

実感出来ない女性というものをある種神聖化し、女性の強さに憧れ、「新しさ」もつとも厳しいものへの挑戦を取てかず子にさせているのである。世間をすべて敵に回したとしても、ひよっとすればそれに打ち勝てる強さ、その生命力にかけているのである。

津島家は、青森県下でも大地主。貴族院議員の父の下で裕福な坊ちやまとして育ち、東大仏文学科に入学した。しかし、その後社会主義と出会い、自らが滅びの民と知つてからは一貫して反エリート道を歩んでいったのである。

そんな太宰にとつて、かつての常識やしきたり、世間に対して刃を向けたとしても、なかなか思い通りにいかない苛立たしさの中で敢てかず子に託したのではないだろうか。女性の強さを持つてすれば、妻の座を獲得せずとも、母として立派に生き抜けるのではあるまいかと。そして、それが世間や常識といった保守的な日常性を打ち破る事により、道徳革命に成功するのだと考へたのである。

太宰が、そしてかず子がこのように一大決心をして飛

び越えようとした反「女大学」・「恋と革命」をも、最近の若い女性達はいとも簡単に越えていくのである。太宰もきつとこの変貌ぶりに驚いているのではあるまいか。何の迷いもなく、何のためらいもなくひとつ飛び込むのである。

かず子が「女・妻・母」の一体化のうち、妻という一部を取り除くために革命という言葉まで持ち出した事情と比べれば、現在「女・妻・母」が時としてはバラバラになる事すら起こり得るのであり、それも恋だの革命だのと言わなくても。それは、どうしてそのようになったのであろうか。

宮本輝は、「誰がはやらせたのかは知らないが、家庭を持ついい歳をした連中が、まるでひとつのファッションであるかのように不倫とやらに走って、いい気分にとまっている。」（「海岸列車」あとがき）と嘆いている。

このような軽さは何処から生まれるのだろうか。
「真剣に生きているまっとうな妻子ある男が、そう簡単に、まっとうな若い娘と深い関係を結ぶわけにはいかない」（同）のはずなのに、何故近年この軽さがこうも話題になるのであろうか。妻子ある男にも問題があるが、今はもう少しこのお相手をする若い女性について考えてみたい。

「目鼻立ちの美しさの底に隠された、その女性の品性の粗末さが如実にあらわれているからである。とりわけ、十七・八歳から二十四・五歳の女性に一見美しいくせに、品性の粗末さをあらわにしている人が多い」（貧しい口元）

「外形に肥料を与えることばかり考えて、精神にその何倍ものこやしが必要であることを知らない、あるいは知らされる機会を持たなかった人たちが、いまちようど十七・八歳から二十四・五歳にさしかかっているかもしれないと私は考えている。そしてその底辺は、ますます拡がっている」（同）と結論付けている。結局は、品性の貧相な女性が増え、礼儀知らずで、心が貧しく、感受性が乏



しく、他人の心を思遣る心使いなど出来ないものであり、
“人のために”は動こうとはしない若者が増々増え続け
ているのである。すべての道は自らに通ずとでも思い込
んでいるのであろうか。

「顔立ちは決して美しい部類に入るとは言えないが、ど
ことなく気品があり、その気品が、そこいらにごろごろ転
がっている生半可な美人など遠く突き離して、毅然と、悠
然と、独特の美しさに輝いている女性がいる。そういう女
性に、貧しい口元の人はいない。」(同)

真の女性の強さは、深く秘めたものであったはずなの
に、今では表面上確かに顎で男性を扱う若いカップルな
どを見掛けるが、いざ困難が立ちはだかると、極めて脆
さが目立つのである。それは、対人関係で如実に表れて
おり、右往左往する姿が目につかぶ。かず子が持ち得た
ような強さがなくても、飛び越えられる容易さから、かえ
って逆に弱く、脆くなっているのかも知れない。表面が
強くなった分、又表面にこやしを与えてばかりいる分、
どうも内面が弱くなってしまうと言えよう。それは、
“人のために”働く事の少なくなつた、特に若い女性に
あてはまるのではあるまいか。

米国の翻訳家カレン・ウィゲンが日本で言い残した言
葉に「五年ぶりに出会った日本人の友達(女子大生)と

話していると、その話題がファッション・アルバイト・
旅行の三つ。何処へ行っても、誰に会ってもこの話題。
二、三時間も経てば、話題はつきる」というのがあつた。
肯けるのである。女子大生だけではなく、多くの若者が
こうなのかも知れない。正しく趣味のために働き、趣味
のために生きているといった感さえる。

自分のために考え、自分のために働き、小さな自分と
共に歩んでいるのであろう。もちろん“大志”など抱く
べくもなく、鍛えられる事も少なく、そして我慢して耐
える事も少なくなっているのである。結局、何が大切な
のかよく判らないのであり、自信が持てないのである。
それゆえ、簡単に飛び越えていくのであり、更に言えば
飛び越えてしまっているのである。

いい恋をして、「口元はつねに毅然とさせておけ」(同)
が結論なのかも知れない。

(2) 妻

妻という座はそれ程重いものであるうか。近年かず子
のように“女・妻・母”のうち妻を飛び越える女性もい
るだろうし、妻や母よりとにかく女として生きていく事
を大切にする女性も数多く出現して来ている。しかし、
一方では妻となり夫となるセレモニ―が商業ベースに完



全に乗っかってしまい、億を越す費用をかけたなり、一般的に言っても数時間のために百万を越す費用をかけるといった具合に派手になって来ている。一種のお祭りなのかも知れないが、新郎・新婦を主役に舞台中央に据え、決まりきった台詞を並べたて、派手な化粧や舞台衣装よろしく舞えや歌えの大騒動なのである。その結婚費用の上昇と共に離婚率も又正比例しているのは、如何にも皮肉な事と言えよう。金をしっかりかけ、着飾った老若男女・知人友人親戚一同の前で仰々しく誓わせないと危なっかしいとも思っているであろうか。

夫婦というものは、「夫のため」に尽さなければ妻とは言えず、「妻のため」に働き、生きねばやはり夫とは言えないだろう。人が「人のため」に尽す、その原型がここに存在するのではないだろうか。

太宰治の小説「ヴィヨンの妻」の中に「人非人でもいいじゃないの。私たちは、生きてゐさへすればいいのよ。」という言葉がある。夫は酒におぼれ、借金をこしらえ、他人の物にまで手を付けるといった有様。そのような夫 人非人に対して、この妻は尚かつ明るく、強く、爽やかに接し「生きてゐさへすればいいのよ。」と言っているのであり、その言葉で夫を救うのである。仕事上手く評価されず、憂さを晴らそうにも晴れず、傷付きな

がら地獄を這いずり回っている夫に「貴方だけじゃないのよ。私だって」と言えば気が収まるかも知れないが、必ずや破局への道を歩むし、結果そうとしかならないだろう。この妻は、地獄の中で尚明るく夫を救うのである。もちろん傷付く妻を救うのも又夫であり、同じ苦しみや痛みを感じ合える関係性でなければならぬのではあるまいか。

宮本輝の小説「幻の光」のゆみ子や「錦繡」の亜紀は、妻として最悪の裏切りを夫から共に受けているのである。そのゆみ子は言う。「何の理由も見つからん自殺という形で、愛するものを喪ったその地団太を踏むような悔しさと哀しさが、胸の中でとぐろを巻いたんです。そして、わたしはその悔しさと哀しさのおかげで、きょうまで生きてこれたのやった。」と。不意に夫から「おいでけぼり」を喰らい生きていく望みもたれ、憤りの中で生後三カ月の愛児勇一と何度も後を追いかけてやうと思うが、夫の死の不可解さとそれへの怒り、そして子供可愛さによって、やっとの事で思い止まるのであった。そんな絶望の淵から時間がかかるが、遂にゆみ子は這い上がり、生きていこうとするのである。このゆみ子の強さとおやかさは、やはり女性としての真の強さから来るのではあるまいか。

「錦繡」の亜紀も又同様に夫の心中事件という「おいでけぼり」を喰い、そのショックたるやはかり知れないものである。「もうこの世に存在しない瀬尾由加子という女性に対してざわざわと全身の血が波立つ程の憎しみを感じました。」生き残った夫への恨み、死んでしまっている由加子に対する嫉妬、そんな二人の事を全く気付かなかった自分自身の馬鹿さ加減。どれをとってみても、亜紀にとつて狂おしい程の屈辱なのであった。傷の癒えない彼女が父親の勧めもあり、忌しい過去をたち切るために再婚するも、またまた夫との冷めた愛、夫の浮気、そして授かった子が障害を持っているといった具合に二重、三重のダメージを受けるのである。しかし、その亜紀が我子清高に励まされて雄々しく生きようとするのである。「体の不自由なお子さんの母として、八年間闘いつづけてこられたことが……きつとあなたという人間に何かある大きな、強い、しかも以前よりもいっそうふくよかなものをもたらしたに違いないと思いました。」

ヴィヨンの妻もゆみ子も亜紀も、何処かで共通している。それは、彼女たちが持つ真の強さというものではないだろうか。苦難の末に、自らとの血のにじむような死闘の末に勝ちとつたもので、容易に飛び越えて得られるものでもなければ、ましてや外見を磨く程度では絶対得

られない、そんなものを彼女達はしつかりと身に備えたのではないか。備わっていたのではなく、生み出していったのである。

「家内に『おれ小説家になるから会社辞める』っていいましたら、しばらくポカンとしてまして、『まあやりましたらやったら』っていうんですね。ほくも変わってのけども、女房も変わってるとなりましたね」(「道行く人たちと」 村田幸子・西阪廣)

「お嬢さん育ちで貧乏など味わったことのない妻の横顔やうしろ姿に、あきらかな世帯やつれの風情を見いだしたとき、私は昼日中から酒を飲み、三畳の間にとじこもって何時間もうなだれていた。もうやめようと思った。あるかなきか自分で知る術のない天分に賭けて、人生を無茶苦茶にしてしまうのは勝手だが、妻や子をまきぞえにするわけにはいかないと考えた。」(「芥川賞と私」)

宮本輝が言うこの言葉の中に夫婦の眞の姿が潜んでいるのではあるまいか。「男が奪い、女が与える」といった関係性の中に夫婦のバランスが保たれるように思われる。「男が奪い、女が奪われる」でもいけないし、「女が与え、男が与えられる」でもない、そのような関係性を追い求めているのである。奪い過ぎれば、その与える妻の姿を見て、しきりと反省する夫でなくてはならないの

ではあるまいか。

「どうしてあんな品の悪い、いやらしい男のもとにあんな人の良さそうな美しい女が嫁いだのだろうと、首をかしげたくなるような夫婦がいる。しかし、そんなカッブルをじっくり観察していると、やがて、ああなるほどと気づくときがくる。彼と彼女は、目に見えぬその人間の基底部に、同じものを有している。」(「命の器」)

よきにつけ、悪しきにつけ、夫婦というのは表裏一体なのであり、やはり誤魔化し切れないものなのかも知れない。



「大事な女房が病気で、帰ってくれと頼んでるんだ。女房とかおりとどっちが大切だ。それは秤に載せるべきではない。女房は、俺の同志なんだ。人生の同志なんだ。その同志を裏切ったり、哀しませたり出来るもんか。」
〔海岸列車〕ここに、宮本輝の妻に対する夫としての決意が述べられているのではないだろうか。彼は妻を裏切ったり、哀しませたりしてはならない人生の同志と位置付けているのである。

妻の生き方を問う事は、即ち夫の生き方を問う事になり、片方だけの答えを求めても結局仕方がないのかも知れない。妻とは、共に人生を生きる同志なのである。

(3) 母

「コマ紐の二銭、ヨーヨーの二銭、が妙に胸にひっかかって、唯貧乏と戦うだけの心の寒々しさがうす汚く、後悔が先だって何もかも哀れに思えて来た……然しその夜、吊ランプのともるうす暗い小家の中は、珍しく親子入り交じった歓声が奇態に湧き起こった。見事ノボルがヨーヨーをつくりあげたからであつた。」(吉野せい「涙をたらしした神」)

「二銭の価値は、キャベツ一個、大きな飴玉十個、茄子二十個、小鯛なら十五匹は買える額とはじき出す。」

(同)

「せまい小家の中から満月の青く輝く戸外にとび出したノボルは、得意気に右手を次第に大きく反動させて、どうやらびゅんびゅんと、光りの中で球は上下をしばじめた。それは軽妙な奇術まがいの遊びというより、厳粛な精魂の怖しいおどりであつた。」(同)

六歳の我子ノボルが、当時流行っていたコマやヨーヨーが欲しくてねだるが、その二銭すらままならない暮しむきである。ノボルは最初ねだるが、諦め、小刀を握ってバカゴマとみんなから呼ばれる鉄輪もなければ、心棒もないただのつべらぼうのものをつくるのであつた。母はコマ紐買うなら、キャベツ一個、茄子二十個と頭に浮び、「手づくりのバカゴマには布より絹紐がふさわしいようだ。」(同)と母はその子の工夫が嬉しく思われ、救われた気分になり、それに応えるべく自らの手で紐を作るのである。又「幾日が過ぎて、ノボルは重たい口で私に二銭のかねをせがんだ。」(同)それは、一斉にはやり出したヨーヨーを買いたいと言つたのであるが、母の脳裏には又しても大きな飴玉二十個、小鯛十五匹が浮ぶのである。仕方なく一人ノボルは小刀をふるい、ヨーヨーに挑むのであつた。母は、二銭のかねが思うにまかせない生活を恨む事なく、東北の開拓農民として朝から晩まで「鉄の柄をますます強く握りしめて振りつづけた。」

(同)のである。

子を哀れに思うもままならず、しかし子も自ら工夫し一つ一つ課題を乗り越えていくのである。又、それをこの母は冷静にかつ暖かい目差しで見つめている。貧しいながらも、明るく家庭。それに一人一人が置かれた環境に耐え弱音を吐く事なく、前向きに努力しようとしているのである。母にとって、子のために何かしてやりたいことも出来ない苦しさ・辛さ。これ程情けない事はないであらうし、子は額に汗して働く父・母の姿を見て何もかもを理解するのである。

この母と子の関係性は、確かに昭和初年の開拓農民の貧しさゆえに起因したとは言え、全てが貧困なるがゆえの成せる業とも言い切れないだろう。それは、一人の母として立つ前に、一人の女性として、人間としてしっかりと大地に根ざし、過酷な自然に立ち向い、かつ苦しい生活に挑む姿がそこにあるからである。

この母は言う。「私が晴れ晴れしいのは家族の誰をも明るくする。母が持つ力に頼れる安心は、子供たちをあたたかい日向でたわむれる犬ころ同然の愛らしい姿に変える。」(吉野せい「緒い畑」)

この吉野せいと宮本輝の母宮本幸恵とは、ほぼ同じ所に位置しているのではないかと思われる。

「夕刊ぎょうさん買うといで」

母の財布には、六十円しかなかった。その六十円を私に手渡ししながら、「十年間、頑張ってみるわ」と母はきつい目で睨みつけてきた……。

「新聞なんかどないすんのん？」

「仕事を捜すんや。おまえも、お母ちゃんを雇ってくれそうなどこ捜してんか。」

だが、五十五歳の、手に何の職もない女の求人、おそれとほみつからなかった。」(五十肩)

宮本輝が二十一歳の時、父は借金を残して母一人子一人を「おいてけぼり」にしたのであった。母は、晩年の父に幾度となく裏切られ、煮え湯を飲まされ、自殺未遂すら起こしていたのである。その母が五十五歳にして、職探しをするのであった。

「春にならん冬は、これまでいっぺんもなかったんや。ここでへこたれたりせえへんでエ」(同)と決意し、今まで弱かった母が立ち上がるのであった。

「あの時の母がなかったら、今日の私はなかった。十六歳で退職と同じに五十肩に見舞われた母を見て、私は何か不思議なるものの加護を思った。」(同)

「私は母という者にはかなわないと思う。母というのは、不思議なばかり知れない力を持っているのだ。」

(母の力)

苦境を“子のため”“自分のため”に乗り越えていく母の力というものは、偉大であり、はかり知れない底力が潜み、秘められているものである。“自分のため”だけに生きる母なら、ここまで強くなれないのではないだろうか。もし生きたとしても、必ずや後悔がつかまとうのである。

「あんたはいつも怒鳴るだけです。怒鳴って怒鳴って、人の気持なんかそのときは爪の先ほども考えへん。伸仁は私が産んだんや。私が育てたんや。」(流転の海)という実感が母の身体に染み付いているのではあるまいか。真の強さは、父親にはない、又父親には持てないこの実感から来るのではないだろうか。

しかし、現在自分を見失っている中年主婦が多いと聞く。特に、四十代の女性が動揺をきたしているのではあるまいか。四十代の女性というのは、やっと子育てが一段落し、二十代後半から三十代の多忙さから解き放たれるのであり、様々な意味で余裕が生まれるのである。“夫のため”“子のため”に生きて来た母がふと疑問を抱くのであり、たちまちその疑問は身体の中を駆け巡り、時には失意に結論を導くのである。気付けば、夫は夫の子は子の世界で自分を必要としないのに気付く。こ

の“おいてけぼり”感が年令と共に、皺の深さと共に襲って来るのであった。

“もっと早く気付けばよかった”と嘆く声があちこちから聞こえてくるのである。そして、その声は共鳴し、更に大きくなり遂に臆病なはずの母が自らの意志とは少しズレた所で動き始めるのである。カルチャーセンターだの、昼食会だの、パートだの、カラオケだの。挙げ句の果てには、金妻だのと、列車は暴走するのである。そして、気付けば“自分のため”だけに生きている自分を発見するのである。

宮本輝の書く「海岸列車」の母は、母である事よりも女である事を選択し、子を捨てて生きたのであり、その母に“おいてけぼり”を喰った兄妹はその後叔父の手に



よって育てられたのである。

「少年期と青年期を経て、夏彦の内部では、(母)はいつしか(自分の本当の故郷)という言葉に置き換えられ、やがて(祖国)という概念に転じた。」(海岸列車)

母なるものに対して過剰なまでの期待と憧憬を抱くのである。その期待や憧憬など音をたてて崩れ去る可能性が大きいという事も百も承知の上で、しかし尚かつ期待を持って生きようとするのである。「自分たちを捨てたのも、のっぴきならない理由があったからだ」「今もきつと「おいてけぼり」にした事を母は悔いているはずだ。と思い描くのであった。

「夏彦は、子供みたいにお母さんを捜しているのよ。」

(同)

遂に、兄夏彦と妹かおりの二人は、母親に会うため意を決して海岸に沿ったトンネルの多い山陰本線に乗り込んだ。そして駅に降り立つと、そこには指が赤くあちこちヒビ割れていて、険のある顔つきの大柄な女性がいた。目の動きや物腰にも品性下劣な雰囲気を漂わせていて、きつとんでもない苦労の連続のためあのような風采になったのであろう。兄弟は、数分もしないうちに上りの列車に飛び乗るのであった。理想の母と現実の母との大きなギャップを容認出来ないのであった。結局は訣別す

るために会いに行つたようなものであった。

自分たちを捨て、妻子ある男の元に走り、報われない苦労の連続の中で生きて来たのか。後生大事に持っていた写真の女性とは別人のような老女が立っていたのである。

「俺たちの親父とお袋は、どっちも賢い人間じゃなかったみたいだな。品性下劣だ。俺たち、そんな男と女とのあいだに生まれたんだな。」(同)

「俺たちは、親に育てられなかった」(同)

「俺もお前も、人間としてどこか冷たいところがあるのは、きつとそのせいなんだろうな」(同)

「おいてけぼり」の後遺症なのかも知れない。

兄妹は、優しくふくよかな母を求めていたのだが、目の前の母は女として生き、苦労を重ねた険のある老女だったのだ。失意と共に過去を断ち切ろうとするのであった。やはり自分たちが甘く、現実が期待通りにはいかなものなのだと思ひ知るのであり、母なるものへの過剰な期待は木っ端微塵。

「自分のため」「女として」「生きて来た母を、結局の所子供たちは許す事が出来ないものであった。

(4) 結び

今、「女・妻・母」について見て来たのであるが、戦

後特に、女性がこの三役を一直線上で使い分けるといふ事がかなり困難になって来ているのではないだろうか。

“夫のため” “子のため” に生き、ひたすら家を守り続けるという生き方だけではなくて来た。それは、価値感の多様化・男女同権を幼ない頃から身を持って学んで来た団塊の世代以降はそう単純には生きていけないのである。もちろん単純な事が間違っている訳でも劣っている訳でもないし、この線上で暮して来た人もいれば、これからも暮していく人はいるのだが。ただ“子のため”の影がうすれていき、その“子”の所に強いて入れるとするならば、“自分自身”という言葉が圧倒的に増えて来たように思われる。

しかし、女性はこの生きていきにくい現実の打策策を持たねば、毅然とした口元の女として生きていけないし、若い時にこそ内面にたっぷり肥料を施しておかねば根や茎が脆くなるのではないだろうか。手間暇かけて自らを鍛えれば、必ず人生の同志と呼べる男（夫）との邂逅の機会を得るのではないかと思われる。類は類を呼ぶのである。

“人のため” に生き、“人のため” に尽す、それが即ち“自分のため” に生きる事につながり、二人でこの関係性を成し遂げねば何もスタートしないのである。この原

型すら手に余るのであれば、その人の“子のため”はいつまでも完成しないのではないだろうか。

ノボルは、買えない貧しさに打ち拉がれる事なく、自分自身で、自分自身のため”に工夫するのである。その事が“母のため”になり、母も救われた気持となって子に感謝するのであり、子は家族の前でヨ・ヨをあやつり笑顔を誘うのであった。支え合ったのである。“自分のため”に頑張る事が自ずと“周囲の人のため”にもなっていた。支え合っているという関係性こそ育んでいかなくてはならないだろう。

“人のため” に生きる事が“自分のため”になり、逆に“自分のため”に真剣に生きる事が“人のため”になるという関係性が大切なのである。

“女・妻・母”の一体化・一体感が崩壊過程にあるのも確かだし、そこから様々な問題点が生じて来ているのも又事実である。しかし、再統一は可能なのだろうか。又、必要なか考える作業は重要である。この結びの部分でも触れたが、必ずや方法はあると思われる。それは、“人として” “人のため”にという事に、もう暫く真剣に拘り、取組んでいけば、その延長線上にやはり答えらしきものが見えて来るように思われる。

日本の労働者・市民の連帯

—— 在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート Ⅸ

梁 永 厚

戦後初期の在日朝鮮人運動の中心的な組織であった在

日本朝鮮人連盟（朝連・一九四五—四九）は、阪神朝鮮人教育事件即ち四・二四教育闘争を組織をあげて闘った。その頃の朝連は、日本共産党の朝鮮人党员グループによって指導されていた。いわば日本共産党の指導下に朝鮮人運動はおかれていたのである。したがって朝連と密接に提携して運動を進めていたのは、日本共産党员や同党が影響を及ぼしている労働組合員や大衆団体の人たちであった。

そうした人びとが、大阪における四・二四教育闘争の折りにどのような連帯のたたかいをしたのかについて、

紹介をしようと思う。

* * *

一九四八年、阪神朝鮮人教育事件が起る前段は、日本の労働運動が二・一スト以後の沈滞期を克服し、ときの片山内閣を退陣へと追いこむ、全官公庁労組の三月闘争が生まれ高揚をみせていた。大阪地方の三月闘争のなかでは、全通大阪地方協議会の各支部が先陣を切っていた。そして全通大阪中郵支部に始まる二十四時間ストは全国へ波及し、全国一斉ストへと高まりつつあった。

こうした闘いの中にあつた日本の労働者は、在日朝鮮人教育の弾圧を図っているのは、自分たちの敵と同一の

相手であると考え、在日朝鮮人教育の自主性を守るた
たかいに連帯行動をとるのである。大阪においては、二
月十六日の「青年建設会議結成大会」（千余名参加）、三
月八日の「国際婦人デー」（五千余名参加）、三月十五日
の「悪税反対市民会議」（三千五百余名参加）等の、青年、
婦人、中小工業者の集会において、それぞれ「朝鮮人教
育への不当弾圧反対」を満場一致で決議し連帯の表明が
なされた。

こうした「在日朝鮮人教育への不当弾圧反対」の声を
逆なでをするかのように、大阪府当局は再三に亘って学
校閉鎖を通告してきた。さし迫った事態に際して、大阪
府朝鮮人教育問題共同闘争委員会は、「民族教育擁護大
阪府人民大会」を四月二十三日に大手前公園で開くこと
を決め、府下の労働組合本部や各大衆団体の本部へ連帯
行動を要請した。

四月二十三日の大会には、日本共産党員、国鉄、全通、
油谷重工、樺本チェーン、大阪可鍛などの各労組員、青
年共産同盟員、電力民主化同盟員のほか多数の労働者・
市民が結集した。とくに、三月闘争以降、先進的なたた
かいを持續させていた全通労組は、各支部に五名づつの
動員を指令した。

大会は、代表団が府当局との交渉に入るや公園内でデ

モをしながら待機することになった。「途中、このデモ
が府庁前の道路へ出てジグザグデモを始め、そして偶発
的に府庁舎内へなだれこんでいった」（当時の日本共産
党大阪市委員吉田氏談）。

府庁内へなだれこんだ在日同胞と、日本人労働者・市
民は、警察のファッショ的な弾圧によって多数の検挙者
を出すに至った。この日検挙された日本人九名は、主に
全通の労働者であった。

警察当局のファッショ的弾圧に憤激した全通労組は、
二十三日のたたかいについて、早速、次のような情宣ピ
ラを作成し、各支部へ配布した。

ピラの内容は次の通りである。

（その一）「ファッショの血の洗礼大手前に荒ぶ」

吾々日本人民解放の日八月十五日、其れは日本帝国主
義の敗北の日であり、又、朝鮮民族解放の日であったの
です。

あの惨虐な大東亜戦争に人民を駆り立て、今日の失望
とどん底に叩きこんだ保守反動内閣は民主主義の仮面を
かなぐり捨てて再び強暴な力を発揮し始めた。

「ファッショが抬頭した」

即ち、反動政府は朝鮮人教育について次のような不法



干渉をして来た。

一、朝鮮人の歴史、文化、風俗を教へてはならない。

一、朝鮮語を使うべからず。

一、現在の朝鮮人学校をとりあげる。

朝鮮民族はこう云う堪え難い屈辱に死を賭して立上がった。

吾々に「日本語を使うな」と云うものがあつたら、どれ程憤ることだろう。

民族の自立、独立性を守るために、昨二十三日、老若男女約二万名が動員された。長時間の交渉に、しびれをさらした大衆は、全員団体交渉の目的を以て、大挙府庁

へなだれ込んだ。

此の大衆のほとぼしる熱情と誠意に、副知事が与えたものはピストルと棍棒であつた。副知事は五分間の裕余を乞うて卑劣にも秘密裡に警察に連絡し、兵庫、西宮の遠方は勿論、大阪市の全ポリス、一〇、〇〇〇名で以て、府庁を十重二十重に包囲し拳銃十数発が轟いた。小鳥を狙う鷹の様に突進して来た警官隊は赤ちゃんを背負つた婦人を階段から突き落とし、泣き叫ぶ幼児を、泥靴で蹂躪、コンボウの旋風を巻き起し血は流れ肉は飛んだ。かくてテロルの惨劇は白昼公然と行なわれた。

大阪地協村上会長以下各支部の組合員約百名は、此の凄まじい民族を愛する熱情に打たれ、心からなる権力への限り無き憎悪を駆り立てられ、官憲の暴力と徹底的に闘つた。

此の問題は決して吾々の今受けつつある弾圧と相違するものでない。今や国際的一連のファシズムは自己の覇権を確立する為に世界の民主勢力に対して手段を選ばぬ強圧的専制政治を強行しつつある。

此野望を打ちくだけ

世界の平和と自由の為に。

四月二十四日

全通大阪地協情宣部

(その二) 『朝鮮民族は日本労働者の敵であろうか』

四月二十三日、大手前広場には一万以上の在阪朝鮮人が集結した。彼等は朝鮮民族の教育の自主権を叫んで府庁内になだれ込んだ。約七千名の警官は、彼等を取り巻き残虐無惨な暴力をふるった。

約五名の死者と二百名に及ぶ負傷者と百五十名余りの検束者が出たと報ぜられている。全通の組合員も現在判明したところでは九名(貯金二、東淀川一、中電二、北浜一、人官公書記局一、地協二)が、検束されている。

これについて多くの日本人は、真相を知らされていない。

街の人々は次のような事を言っている。「戦争にさえ勝っていたら朝鮮人なんか、指一本ふれさせないのに情無いことだ」。

職場の勤労者は、

「大体朝鮮人のお先棒をかついで日本の労働者が応援に参加するなんてもっての外だ」。

ところで朝鮮人は何と言っているか。「日本の労働者は朝鮮民族の様な弱小民族を圧迫するものが一体何ものであるかを知らないのだろうか」。

「日本の労働者は彼等の敵と朝鮮民族を弾圧している敵と同じ資本家権力であると言うことを知らないのだ

ろうか」。

朝鮮民族は屈辱と忍苦の長い歴史の中から勤労階級を中心とする民族独立、この如き意志とこれに勝ち抜く為の鉄の如き団結を培った。

吾々日本労働階級はどうか。

現在吾々日本民族の置かれて居る状態と朝鮮民族の置かれて居る状態と一体どこがどれだけ違うのか。

英国の植民地政策が民族感情の対立を利用して労働階級を圧迫し民族独立の原動力を封殺しつつ遂行されたことは歴史に明らかである。



吾々労働階級を朝鮮民族と対立させ、その感情を煽動して来たものは遂に吾々労働者の血の犠牲による強盗戦争を展開し、その終り頃には朝鮮人をも赤子と称し戦線にかりたてた。

「今」吾々の要求を拒否し吾々の生活を屈辱の中へ入り込み、吾々民族の独立を売り渡し吾々を奴隷的狀態におとし入れパンパンの享樂に浸らんとするものは誰か。朝鮮民族の教育自主権を弾圧するものは以上の如き労働者の基本的権利を剝奪せんとするものと別ものだろうか。

当時全通は最後迄朝鮮の兄弟と行動を共にした。勿論朝鮮民族中にも日本の資本家と同じ様な民族の反逆者（朝鮮建国青年同盟の右翼テロ団体）が居る。これらの朝鮮人は当日に於ても自己の民族を裏切り日本の労働者に対しては横暴を極めて居る。

然し朝鮮の勤労人民大衆は全通に対し限りなき親愛の情を抱いている。

全通の旗に心からの感謝の念を抱いている。

日本の全勤労者は朝鮮人と手を結ばねばならない。そして民族対立の策謀を打破し吾々を職階制、奴隷賃金に縛りつけようとする共通の敵を打倒しなければならぬ。

・民主民族戦線を結成せよ。

・弱小民族の圧迫に反対せよ。

・人民の敵芦田内閣を打倒せよ。

・残虐極りなき官憲のテロを粉碎せよ。

・職階制、時間制の奴隷賃金飽迄反対。

四月二十五日

全通大阪地協情宣部

在日朝鮮人教育の自主権擁護の闘争に、日本の労働者が連帯をする意義を強くアピールしている。

四月二十六日に再度、「朝鮮人学校閉鎖反対人民大会」が開かれることになった。この大会へ日本の労働者が参加することを控こうと、米占領軍大阪軍政部は、二十六日に全通地協の村上弘会長を召喚し、尋問をした。米軍係官の尋問に対して村上氏は、次のように応答している（通信省労務局編『通信労働運動史』一九四九年刊 九二二―九二三頁）。

Q 今回の朝鮮人デモを指導したのではないか？

A それは参加だ。

Q 地協委員会で参加することを決定したのか？

A その通り。

Q 反逆ではないか？

A 民族の自主権でやった。

Q 背後関係はないか？

A ない。

Q 組合で九〇%反対してもやるのか？

A 民主的決議でやったものでその問題は起らない。

Q 個人的に共産党員が行ったのか？

A そうではない。

Q 朝鮮人独自の問題についても関係するののか？

A 日本勤労人民大衆が協力するのは当然である。

Q 座り込みについてどう考えるか？

A 勢いの趣くところ多数参加したまでである。所謂熱意である。

Q 朝鮮人は日本の法律を犯してもよいのか？

A そうさせたのは誰か。

そうなった原因を考えてほしい。

Q 暴力を振うことはよいのか？

A そのようなことは意図していない。

Q 事実をよく調査の上でやってもらいたい。

A 我々がせざるを得なくなる諸条件について、考えてほしい。

こうした組合運動への弾圧・干渉にもかかわらず多数の日本人労働者・市民が参加し連帯を示した。そして、

この日も、当局の弾圧によって死者一名を含む多数の負傷者を出したのである。たたかいは、二十六日以降も連帯の絆を固めながら続けられた。

数日後の第十九回大阪地方メーデーにおいても産別系の組合を中心として開かれた中央集会で、「在日朝鮮人教育の自主権擁護、不当弾圧反対」などが、他の議題とともに決議された。

五月四日から六日にかけて、「在日朝鮮人学校事件真相調査団」※が、神戸事件の調査を了えて、大阪入りをした。

※ 団長鹿地亘（日本民主主義文化連盟）

団員平野義太郎（中国研究所）、尾形昭二（世界

経済研究所）、布施辰治（自由法曹団）、渡辺

義通（民主主義科学者協会）、川畑静二（産

別会議）、田島惇（全労連）、渡辺三知夫（世

界労連加入促進委員会）

調査団は、大阪における事件の真相を調査した上で、事件の本質（神戸事件と合わせて）を次のように指摘した。

本事件はこれまで当局の発表と新聞の報道によれば、『法律を無視した朝鮮人の暴動事件』『共産党の計画的に

煽動し指導した暴動事件」というのが一般的である。

これは真実か否か？

本調査団の調査したかぎり、「共産党の計画指導」もなければ「暴動事件」でもない。本調査団はノーズタロクの新聞論説がいうごとく共産党の指導などということとは本質的な問題ではないことを確めた。

- (一) 神戸、大阪事件を政府は「暴動」事件として誇大に曲げて宣伝し、被検挙者の一部に重罪を科そうとしている。だが、朝鮮人のごく少数に行きすぎた行為に出たものがあつたのは事実であるが、一般大衆行動は秩序的になされ、「暴動」とか「騒じよう」とかいうべき事態を認められる根拠はなかつた。しかしこれらの事件は文部省の既定方針が終始誠意のない態度と強圧手段をもつて強行されてきた結果起こつたことは疑いをいれない。現地の日本当局さえもわれわれ調査団に対して、学校閉鎖の日取りまで指令されてきたので解決点を見だす時間上の予猶さえなかつた旨を述べ、神戸の市丸検事正は事件がこゝうなつたのは「政府に責任がある」と明言している。
- (二) 官庁的報道はこれらの事件が一部の急進分子によつて計画的に導かれたとしているが、事實は反対であつた。幹部が闘争の先頭に立つことは勿論である

が、しかし、かれらが大衆行動に秩序と組織を与へるためにベストをつくした事実をわれわれに立証することが出来る。大衆行動を計画的に組織し指導すること、個々の偶発的な出来事の原因、誘因などを混同することは全く非合理である。

- (三) 官庁的報道は、この事件の悪化が日本共産党の煽動によるのだとの宣伝に努めている。日本共産党だけでなく、日本の労働組合、民主諸団体は朝鮮人側の要求を正しく理解し、これを支持して動いた。日本共産党は、「朝鮮人の教育は日本の教育制度に従つて行われるべきであるが、用語、教科書、教員等に関して朝鮮民族の特殊性をとり入れること」を主張し、少数民族に対する圧迫に抗議した。現地の党員はこの方針の下に朝鮮人側を積極的に支援したが、調査団は共産党員が暴力行為の煽動や挑発をなしたという何等の事実をも見出すことが出来なかつた。当の兵庫県知事、教育部長、および市丸検事正、田辺次席検事は「日本共産党が知事室に乱入した事實はなく、暴動を煽動し、指導したとは思わない」といつて、新聞報道の誤りを指摘している。

本調査団は調査に当り、先づ毎日新聞と朝日新聞の各大阪支局を訪れ、社会部の責任者と会見した。



毎日の社会部では次の如く語った。

(一) これは政治問題である。朝鮮学校には北朝鮮と南朝鮮との系統があり、事件をおこしたのは北朝鮮分
子である。

(二) 朝鮮人父兄はその居住地の各日本小学校にその
子弟を通学させる方が便利だから朝鮮学校にいれる

ことを『不便』として、喜んでいなかった。
(三) 暴動事件になったのは、けしかけたのが、『南朝鮮系
の』建青であった場合もある。投石者などにはそれ
が多かった。

朝日支局の社会部では次の如く語った。

(一) 当支局では、はじめ一地方事件と思っていたが、
東京本社に記者を出張せしめて、これが『国際的な
大きい政治的事件』と目されているのを始めて知っ
た。

これら二つの意見から問題になることは、当局が
この問題を引きおこし、かつ処理せんとするに際し
て、新聞輿論に反映せしめようとした基本態度であ
る。

第一には、大多数朝鮮人さえ望んでいないことを、
一部共産主義分子、朝連幹部らが強制して暴動にか
り立てたといふ印象をねらったこと。

例えば、共産党員、労働組合員が、朝鮮人の当然
の要求を支援し、『人民大会』に応援演説を行った
という事実で、当局は、鈴木局長の言に見られる如
く、事件の責任を『共産主義者の煽動』に帰しよう
とした。

むろん、このことは共産主義者、民主主義者に対

して事情を知らぬ人民大衆のけしかけようとする挑撥的陰謀である。

第二には、大阪府大塚副知事の言に典型的である如く、やはり事件の本質をいんべいし『朝鮮人の、法律を無視する暴動的傾向』に責めを負わせるように印象づけたこと。これは反動支配の常套手段である日鮮民族間の感情挑撥の危険な陰謀である。我々は人震災当時における朝鮮人と社会主義者の大量虐殺の不祥事が何のためどのように作り上げられたかを充分心にとめておかねばならぬ。

第三には、これに加えて、朝鮮人間の内部的政治対立の利用である。このような挑発はむろん、朝鮮人間の民主的な民族的団結を破壊することが目的とされている。

しかも、在日朝鮮人の大多数の民主連合戦線の団体である朝連を『北鮮系』と誣い、その政治色をこぢつけ、戦時中日本軍国主義者と協力せる少数グループである建青その他を『南鮮系』と称しつ、当面南朝鮮に単独選挙が行われている機会につけ入り、民主分子を抑えつけ、ことの真相については、これをごま化そうとした傾向は注目されねばならない。

要するに、この種の三つの挑発は『共産主義者』

『暴動的朝鮮人』『北鮮系』が危険な勢力で、これに鎮圧するには、充分な警察力を強化し、武装を強化しなければならぬという、鈴木警察局長の如き主張を導き出すに利用されている。

終戦後二年の間、まったく等閑に附して来た朝鮮人の文教問題を、しかし、特に今日に至って当局が強硬な態度でとり上げ始めたということは、今回の事件の最も直接の問題であるが、これはいうまでもなく、今日に至って在日朝鮮人の法律的地位をいかに拘束するかということが彼らにとって、さし迫った問題となつてい内外の情勢を反映している。

こゝに、いわゆる、南鮮か北鮮かというごとき臆説をこの事件にからませる理由もあるのであるが、日本側当局としては、在日朝鮮人を、今更『日本人』として拘束する方針をとらうとした。

当局のよりどころとしていることは、各地方当局者の言を通じてわかるように、今日まで日本に在住する朝鮮人は帰国を肯じず、日本人として取扱われることを『自ら択んだ』という一方的解釈である。

これを彼らは連合国側方針としているが、この点についていえば、連合国司令部は一九四六年十一月六日のステートメントにおいて、かゝる誤説をただし、

明白に朝鮮人が解放されたる民族（非日本人）として保護されねばならぬことを指令している。

健全なる常識による限り、ポツダム宣言を受諾したはずの日本の当局は、朝鮮が日本の植民地的支配を離脱したことの承認と共に、今日の南北の系争が国際的に解決されて、統一的な独立朝鮮が成立し、在日朝鮮人の帰国の条件が備るまでは、解放民族としてこの『過渡的』な困難な情態に、あらゆる保護と援助とを加えるのが義務であった。

しかるに、彼らの帰国さえ困難な今日の情況につけ込む形式で、上述とは全く逆の文教政策を日本当局は強制した。

しかも『移住民』『帰国者』の如き法的解釈を一方的に押しつけながら、権利の面においては、まったく選挙権も被選挙権もあたえる考慮さえしていない矛盾を他面には曝露した。

要するに当局がめざすところは、昨今日本人民に對する文部政策において、顯著にめだちはじめた各種の統制的傾向が示す反動支配のらち内に朝鮮人の教育問題を引き入れること、又これを彼らの法的地位の無力化と併行させて企図していることが疑う余地なく看取される。

こゝに在日朝鮮人の死を期した防衛の鬭争はひき起されるを得ない根柢があった。しかも、当局として不可避的に惹き起されて来る衝突を予知しつつこれに鎮圧を加えることを機会として、日本の国家警察化（旧日本の復活）の傾向を助成するに利用している。問題はこの政策の根本的改変なしに、決して将来にわたって解決を見ることはできない。

本調査団の各方面にわたる調査の結果を概括し、到達せざるを得ない結論はおおよそ以上の如くである。

ちなみに、この結果は、当局側の『共産党の策謀』等々の挑発にもか、わらず、問題の正当な理解にもとづいて、朝鮮人側の死活の要求をあくまで支持した日本の民主主義者（共産党、全通の大阪、京都地協はじめ労働組合等）の行動が広く朝鮮人の間に感動を呼びおこし、『日本の人民勢力との協力こそは唯一のたのみである』という理解を彼らに普及させる結果となっている事実を附記しておく。

（一九四八年五月十五日）

* * *

八月三日、大手前の毎日会館において、鬭争の犠牲者金太一少年の人民葬が行われた（約三千名参加）。この

催しには日本共産党川上貫一氏が参席し連帯の弔詞を読んだ。なお催しの終了後、北区中崎町の朝連大阪本部まで追悼のデモを行った。

全国的には、四月二十七日、共産党の徳田書記長が衆議院の院内で「朝鮮人の教育は、日本の教育制度に従って行われるべきであるが、用語・教科書、教員などに関して朝鮮民族の特殊性をとり入れることを主張してきた。朝鮮人諸君も大体これと同様の主張を以て当局と交渉していたようである。我々の受けとった情報によれば、反動的挑発者を示威運動の中に潜入させた疑いがある。かくして神戸の如き事態にまでならせたと推定する。

この事件を機会に、日本共産党は暴力革命を主張していないし、如何なる大衆行動にあつても常に正々堂々と秩序ある活動をすることを共産党の任務として党中央部は、それを嚴重に守るように各党員に指令してある」と談話を発表している。

四月二十八日には、東京日比谷野外音楽堂において「人権蹂躪、不当弾圧反対全労働者大会」が、産別、総同盟、中立などの労組と青共、その他民主団体の共催で開かれ、約八千名の労働者が集会後、「東宝の首切り反対」「在日朝鮮人の自主教育不当弾圧反対」「人権蹂躪、不当弾圧反対」などのプラカードを掲げ、国会、首相官邸、中央

労働委員会へデモを行った。

四月三十日、衆議院本会議において、鈴木法務総裁が、神戸・大阪の事態について報告を行うや、日本共産党野坂参三議員は「……これは日本における人権蹂躪のハッキリした現れである。政府は一月にこの教育問題について命令を出しているが、この期限である三月三十一日までに政府として問題解決のためにどれだけ手をうったか。私たちはこの点で大きな疑問をもっている。

われわれは教育問題については関係がある。しかし一人としてもこれを煽動して暴動までもつていこうとしたものでないことを断言する（議場騒然）。事態をこまでもつてきたのは政府の責任である。政府の責任を私は



追求する」と、質問している。

神戸、大阪の現地調査を了えた「朝鮮人学校事件真相調査団」は五月七日に「……当日の大衆行動は、朝鮮人の死活問題として権利擁護に基く自発的行動であった。

この問題は、平和な将来の両国関係に危険な暗影を投げたものである。事は単に朝鮮人の学校問題でなく、日本人民の問題であり、そして、世界の平和に関連する重大な問題である」と声明を発表し、五月十六日には、報告集会を東京一ツ橋の教育会館で開いた。

全通労組の第五回臨時大会（六月二十二日―二十五日、（於金沢市）の記録集のなかには、弾圧対策委員会の経過報告のなかで、

四、大阪村上会長検束事件および大阪地協犠牲者問題
1. 四月二十三日、生野、東成、布施その他において、朝鮮人教育問題についてデモを敢行した。

これに先だち東京搬送工事局事件以来、釈放運動の署名録を送ってくれた朝連に対して二十二日地協委員会は教育の自主性を獲得する正しい闘争を支持し応援することに決定、当時、百名を大会に送り激励した。

2. 当日大会において……百七十五名が不当に検挙されたが、この中に全通関係者は……九名であつ

た。

3. ……略……

4. 五月二日早朝六時半頃、騒擾罪、建造物侵入罪の容疑者として村上弘を自宅より逮捕した。

5. 五月三日、地協闘争委員辻君は参考人として大阪南署に呼出されたまま拘留された。

6. ……略……

7. 六月 日、大阪地協会長長木村、大阪地協峠氏外、上京してGHQキレン課長に嘆願を行った……。

現在まで署名録に産別傘下各単産、朝連を含み、各支部より寄せられた数は二百万に及んでいる（『全通、全電通労働運動史資料』第十集一四二頁）。

ほかに、『現代日本の歴史』下巻（青木書店一九五三年刊 三六三頁）には、「村上弘を重労働四年に処しても、勤労階級の国際連帯精神をうちくたくすることはできなかった。朝鮮人弾圧によせられた釈放要求署名の数は二百五十万、救援基金は五十八万円に達した。日本の労働階級は官憲の不当弾圧につよく反対するとともに『在日朝鮮人の自主教育の自由』を要求して、『民族の危機』と『少数民族にたいする圧迫が、同一の根源からきている』ことをつかんでいた」と、記述されている。

大阪における闘いで、当局に検挙された人びとの裁判の経過はどうであつたらうか。

大阪市警察局は、騒擾事件特別捜査本部を設けて取調べを行い、検挙者中三十三名（内、日本人九名）を、送検、他は釈放した。送検された者は五月六日までに全員が起訴された。被起訴者の内十九名は、五月五日に米軍の軍事裁判所の拘禁状で拘禁収容された。

三十三名の被起訴者については、二組に分けられて、五月二十七日に尹京柱氏他二十三名（日本人を含む）が、大阪地方裁判所笠松裁判長、地検米田検事、加藤弁護士の担当による第一回公判が開かれた。翌日には、李仲林氏他九名（日本人を含む）の公判が、同じ担当によつて始められた。

起訴状は、騒擾罪と建物侵入罪であつた。加藤弁護士は「騒擾の率先助勢となつているが、事實は率先助勢でなく附和随行者である。騒擾罪という群衆犯で起訴される場合、個人の責任能力を追求する建造物侵入罪は、当然、騒擾罪に吸収されるべきである」と主張し、公訴事實の不当性について争つた。しかし、地裁笠松裁判長は、騒擾罪、建造物侵入罪として、各々懲役四ヵ月乃至八ヵ月、三年間の執行猶予の判決を言渡した。

この判決については、被告側・検察側の双方が控訴し、九月二日に大阪高裁は、李元五氏を無罪にしたほかは、地裁と同じ判決を下した。最高裁まで持ち込み争つたが、一九四九年六月十一日、上告棄却の判決がなされた。

この日本の裁判の進行と並行して、米占領軍大阪軍政部は、さきに拘禁した十九名を軍事裁判に附した。軍事裁判は大阪における先進的な労組、朝鮮人の活動家養成機関等の弱体化をねらつた意図的な政治裁判であつた。

六月二日、軍事裁判に附すについて、米軍第二十六師団長、A・E・ブラウン代将は「本件の審判は公平にして不偏なることを約束する」と声明をした。事實はどうであつたらうか。

米軍第二十五師団軍事裁判所は、十九名の裁判を六月十四日より始めた。裁判長レイモン中佐、検事ザンガー大尉、弁護士レーノルズ大尉であつた。

軍事裁判における起訴事實は

被告人は一九四八年四月二十三日頃、日本本洲大阪において、騒擾行為に出たものであつて、被告人等は約二〇〇〇名に達する氏名不詳者と共に不正に且つ不法に又暴動的態度と暴力と騒乱の方法を以つて、大阪府庁に侵入して騒擾したる上、同庁舎にある大阪府知事室に乱入して、同室の一部その設備並びに右庁舎を



損壊したものである。

かかる騷擾行為は日本占領軍の治安に有害であり、同時にその占領目的に有害な行為といふべきである。

米二十五師団憲兵司令官

E・W・マーサー大尉

適用条文

一九四六年三月十一日附、米第八軍実施命令第二十九号第四C（昭和二十一年勅令第三百一十一号、第一条、第二号と同主旨）

であった。

六月十四日より、二十日までは、検察側の証人として地検の泉、天野、竹内、北元検事、大阪市警察局長の清水公安課長、国富公安部長、東警察署の長崎署長、大阪府の大塚副知事その他が喚問された。

検察側証人として法廷へ出た大阪市警察局長公安第二課、藤木警部補は、村上弘、東米吉の両氏を確認した上、「……村上被告はトラックの上にあがり、非常に激烈な調子で、かつて日本の軍国主義者らは、三・一万歳事件で多数の朝鮮人を殺した。さきに全通を弾圧した反動政府は、いまたまた諸君らを弾圧せんとしている。我々勤労大衆は朝鮮民族のこの闘いをあくまで支持する。我々の共同の敵は、反動政府の出先機関の牙城——あの府庁

であるといった」と証言している。

警察当局は、日本共産党と朝鮮人の教育闘争を結びつけようと、府庁前で「日本共産党」の腕章をした者を見たとか、五月二日村上氏検挙のとき、日本共産党大阪地方委員会が、各民主団体、労働組合におくった「朝鮮人学校問題で座り込み戦術でたたかっているが、われわれも全面的に支援したい」という案内状を押収したとして法廷へ出している。

六月二十一日より、弁護人側の反証に入り各被告が暴動的な破壊行為をしていない事実の主張がなされた。

その内容は、

朝鮮人教育問題は次の点で正しい事を了解し応援した。

1. 朝鮮人は日本の法律に従うことは原則的に当然であるが、その民族の特殊性は承認さるべきである。
2. この趣旨で朝鮮人に自国語に依る教育をさせることは正しい。
3. 不当な学校閉鎖を一方的にするのではなく団体交渉で納得させた上朝鮮人教育の特殊性を考慮すべきである。
4. 朝鮮人教育問題は、日本政府が誠意を以て当れば解決し得ることである。解決困難の最大原因は日本

官憲の朝鮮民族に対する誤った民族的偏見に依るところが多い。

応援参加の経緯

全通地協の場合、四月二十二日中央電信局で開いた地協拡大闘争委員会において、執行部より提案があり慎重討論の結果、朝鮮人教育自主権獲得闘争の正しいことを認め、之を支持し四月二十三日午後一時より府庁前で開かれる朝鮮人教育自主権獲得人民大会に組合員を動員して激励することに決議した。

大会の経過

全通村上会長の場合、午後一時三十分乃至二時の間に府庁前広場に到着、大会参加朝鮮人及友誼団体の演説が始まり、村上は全通を代表して、「吾々全通大阪地協は、最低賃金制確立、大阪に於ける地域的生活給の確立の為、今日まで闘つて来た。然るに保守反動内閣は働く者の生活を益々窮地に追ひ込む政策しか取らず、権力は絶えず労働者を拘束する鉄鎖として現れている。弱小民族としての諸君の窮状も吾々の苦しい現状も全く同じ原因によって生れている。闘いましょう。お互いに」と、連帯表明をした。午後三時十分頃、交渉が停顿しているので団体交渉を応援すべく府庁へ陳情に入ったのであって、

何等騷擾を意図するものでない。組合の決議に従って参加したものであり、個人として行動したものでない。

と述べている。

他の被告たちも、朝鮮人教育の自主性を尊重することの正当性を主張し、それを守るため、大会に参加したことを陳述した。

ところが、検察側は「被告人は何れもその現場に居合わせ、且つ何等かの程度において之に参加したことを告白している。それ故に各被告が現場に居合わせ之に参加したことが自己の意志によるものでないことを証明出来ない以上、当時の暴徒に対して責任を負わねばならない。

本件のような状況の下において被告人が何等かの特別な不法行為に出ていることを立証せねばならないとする論は重要でない。公務を執行している日本政府の代表者たちを軽んじ、蔑視し又脅迫する如き暴挙或いは不法な行為は、日本政府を弱体化するのみならず、占領軍の安全並びにその目的に影響を及ぼすものである」という、ファッショ的論理でもって求刑がなされた。

たたかいに連帯し朝鮮人と共同行動をとった日本の労働者や市民は、大会の主催者でもなく、単なる応援に駆

けつけたに過ぎないにもかかわらず、責任をとれと重労働の論告が行われた。

六月二十六日、判決公判が開かれた。

判決は、日本人被告二名に重労働四年、四名に重労働三年、四名に重労働二年。朝鮮人被告は三名に重労働三年、四名に重労働二年、一名に重労働一年、朝鮮人被告は服役

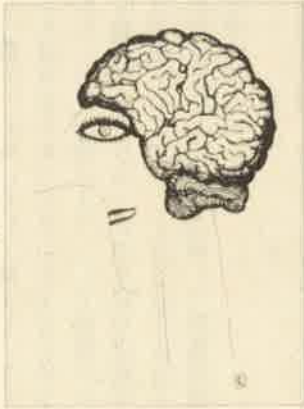
後南朝鮮への強制追放が付加された。

この判決にたいして米軍第二十六師団長 A・E・ブラウン代将は、判決調査を七月二日に了え「裁判所の不正または不公平を疑うに足るものはなかった」と、判決を承認し刑の執行を命じた。

朝鮮人被告で重労働一年を言渡された金瑞鎬氏（別名金石松）は、一九四九年七月に、大阪駅より貨車に乗せられ南朝鮮へ強制送還された。他の朝鮮人被告も刑期終了後、それぞれ強制送還されている。金瑞鎬氏は南朝鮮を経て共和国へ渡ったが、他の人びとは消息不詳である。

四・二四教育闘争は、植民地教育（皇民化教育）を身をもって経験してきた朝鮮人にとって、自分たちの子女に民族教育を与えることは、政治を超えた民族的願望であった。この願望を踏みにじろうとする日本当局への憤

『書評』編集 STAFF募集!!



りをもつて全同胞的にたたかわれた闘争であり、その正当性を認めた日本の労働者・市民の強い連帯の闘いであった。さらに戦後日本共産党の再建にたいする在日朝鮮人のかかわりを知る共産党員が積極的に連帯をし、闘ったことは当然の成り行きであった。

日本共産党は、八月二十三日より開かれた、第二回中央委員会における徳田書記長報告の中で、「大阪・神戸における教育問題は、人民闘争の発展の新しい段階として極めて重要である。それは人権蹂躪が大規模に行われたこと、特に官憲が計画的に攪乱者を送り、暴力に訴えたこと、当該民族との結合、彼らとともに民主戦線を強

固に結成することが、民族の独立を達成するばかりでなく、さらに民族相互の結合を基礎とする世界平和の樹立が可能であることを経験したという意味で重要である。圧迫にたいする用意が足りず攪乱にたいする警戒が十分ではあったが、全体として見れば相当成功した。とくに重大なことは官憲がファッシスト的方向にすすみつつあることが暴露され、世界的にこの問題が批判され、後退しなければならなくなっていることである。他方われわれの側はこの問題をできるだけ全国的にひろげるあらゆる方面から闘争を激成し、青年・婦人・少年・一般市民の新しい会にこの問題を宣伝し、彼らを闘争に広汎に

『書評』は私たちにによる文化形成のための印刷メディアです。あなたも『書評』を創ってみませんか。

「雑誌」に興味のある方、思想・文化活動をやりたい方は、『書評』編集をはじめ、講演会や映画上映のSTAFFになってみましょう。

私たちは、いつでもあなたをお待ちしています。

★連絡先 千565吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合本部3F組織部内

『書評』編集委員会

☎387-9998 (直通)

☎388-1121 (内線 4821)

動員しえたのである。もちろん相当の損害はあった。しかしこの損害を新しい闘争の発展において補充し、さらに勢力を増強しえた点は成功であったといわなければならない。損害を恐れて、これを避けようとして萎縮すれば、更に一層大きな損害をこうむる。かかる退却主義は最も有害である。』（『前衛』三十一号、一九四八年十月号）と、この朝・日人民が連帯をして闘った四・二四教育闘争の意義と問題点を明確にしている。

* * *

四・二四教育闘争の翌年九月、朝連は「団体等規正令」を適用されて強制解散させられた。そして一時的な組織の空白を経て、在日朝鮮統一民主戦線（民戦、一九五〇—一九五五）を結成した。この組織も日本共産党の朝鮮人党員グループによって指導された。

民戦は朝鮮戦争期に祖国・朝鮮民主主義人民共和国を防衛する闘いと並行して、日本共産党の単独講和反対、再軍備反対の闘いの前楯的な役割、即ち極左冒険主義に走るという愚を犯した。

ところが戦後十年を節目にした世界政治の新潮流に因む、日本の政界の再編、日本共産党の新路線（六全協決定）の策定などにより、在日朝鮮人運動は共産党の指導から離れることになった。そして朝鮮労働党の指令に基

づき民戦を解消し在日朝鮮人総連合会（朝鮮総連、一九五五—）を結成し、日本の内政に干渉せず、民族権利の擁護運動に力を注ぎはじめた。これ以後、共産党は在日朝鮮人の運動にたいする支援と連帯の立場を積極的にとるようになった。もちろん共産党系の労働組合、大衆団体も党に強い連帯を表明した。

しかし日本共産党と朝鮮労働党の関係が、一九六八年の両党首脳会談後に不協和音を発するようになり、その影響は朝鮮総連の運動にも及び、現在は全く冷え切った状況になっている。冷えた関係になった一九七〇年代以降は、日本社会党が朝鮮労働党との提携を強め朝鮮総連の運動を支援しており、同党系列の労働組合と大衆団体が党に倣って支援と連帯の運動を展げている。

日本共産党は、朝鮮労働党や朝鮮総連との関係が冷めているからなのか、自らが指導のちに党委員長になる人が軍事裁判により重労働の刑を科されたもした、在日朝鮮人教育の自主性を守る闘いへの連帯の足跡について、党の『五十年史』、『六十年史』には一行も触れていない。どうしてなのか、なんらかの弁明がほしいものである。

（ヤン ヨンフ・文学部非常勤講師）

小説のなかの異境

—— ロマン主義文学論序説 —— その二二

池田浩士

Ⅲ 未成の共和国 —— 外なる共同体のために(その三)

三、△失われた世界▽というユートピア

1. 生きのびる幻滅

夢の実現が阻まれたとき、夢はもつぱらついえさるのではない。夢は、幻滅となって生きのびる。夢が根底的であればあるほど、その後史を生きる幻滅は深い。

『緑の日章旗』の理想国家を戦争が雲散霧消させたのち、

この戦争の敗北によって、東亜の解放という理想そのものが沈黙せざるをえなかった。山中峯太郎はほとんど忘れ去られた存在として敗戦後の二十年余を生き、戦争協力の責任をとるため一家自決を考えたといい、戦後わずか三日目に執筆を決意した長篇『地球発狂事件』(九月一日から連載開始)で、今度は宇宙からの地球侵略にたいして世界各国が一致団結し、しかも平和的な手段で宇宙人を退去させるというストーリーによって、反戦平和のSF作家へと転身をとげた。アジアの解放という名の進出の夢は、存在しなかったかのようですらあった。だが、もちろんそれは存在しなかったのではないの

みか、消え失ったのでさえもなかったのだ。

一九三〇年代と一九四五年八月以後とは、日本の文学表現の領域でも、まったく断絶した二つの時代ではなかったのだ。この二つの時代をもつとも歴史とつなぐ独自のジャンルがある。それは、人跡未踏の地に深くわけいる探検家たちを描く小説にはかならない。

未知の異境への探検行は、おそらくはすでに人類の原初の時代から、夜の焚火を囲むまどいの、もつとも魅力的なテーマのひとつだったのだろう。古代の叙事詩や少なからぬ神話そのものが、ほとんどそのまま、未踏の地を探る冒険の物語である。オデュッセウスも、オルフェウスも、オルフェウスとまったく同じように妻を追って黄泉の国へ下りていったイザナギも、人びとがいま生きるこの世界とは別の異次元の世界への、旅人たちだった。日本の一九三〇年代は、こうした旅人たちの物語をおびただしく生んだ一時代でもあったのである。もちろん、これらの物語は、日本国家の海外進出・植民地支配とさならなる膨脹によつて、具体的な舞台を提供されていた。のちに大東亜共栄圏構想のなかに包摂される諸地域が、旅人たちのところをとらえる秘境だった。けれども、これらの探検行は、やはり、軍事冒険SFに描かれたものとは別種の空想を追っていたのである。

『完全犯罪』や『黒死館殺人事件』など一九三〇年代

前半の諸作品で、日本の探偵小説にオカルト趣味の息吹きをはじめて本格的にもたらした小栗虫太郎（一九〇一―四六）は、三九年五月から、中央アジアの奥地を主要な舞台とする連作秘境小説をつぎつぎと発表しはじめる。第一作『有尾人』以下、計十三篇のシリーズは、拡大の

一途をたどる中国侵略戦争のさなかで、三冊の単行本に分けて刊行された。連作のいずれもが、大砂漠や大草原の奥深くに生きる未知の人類や、とうの昔に滅びたとされている生物たちとの邂逅を主題としたものだった。同じころ、橘外男（二八九四―一九五四）は、『ペイラの獅子像』（二八年二月）、『死の蔭』探検記（二八年七月）、『マトモツソ溪谷』（三九年三月）などの諸作品で、アジアの奥地からさらにはアフリカや南アメリカにまで舞台を拡げながら、秘境小説を書きつづっていた。橘外男の発表の場は、二〇年代モダニズム文化の中心的な担い手のひとつだった雑誌『新青年』のほか、『オール読物』、『文芸春秋』など、大量の読者層を擁するマス・メディアだった。これらの雑誌には、小栗虫太郎や橘外男のほかにも、少なからぬ作家たちが、このジャンルの作品を発表していた。日本のなかの秘境、つまり隠れ里を好んで描いた大衆小説家、国枝史郎もまた、中央アジアの奥

地を舞台にした小説（『沙漠の古都』）に筆を染めた。

かれらがそこで描こうとしたのは、現実の日本の国家社会の焦眉の問題とはまったく疎遠な仮構の世界だった。日本によって解放されるべきアジアなどではなく、すでにじつは存在しない世界、永遠に過ぎ去った時間だった。日本人と手をたずさえて自己解放に立ちあがるアジアの民衆などではなく、人間によって消し去られた非人間であり、人間の目から隠れてのみ生存をつづけることができる自然的生物だった。滅びと過去へのこの逃避、この後向きのユートピア主義は、あらためて言うまでもなく、アクチュアルな国家的課題からの退避であり、科学技術の開発によって欧米列強を粉碎するという軍事愛国SFの基本姿勢にたいする、文学そのものの抵抗でもあった。しかし、それはまた、山中峯太郎の諸作品が希求した解放の夢も、あるいは木々高太郎がかいまみた共同体の夢も、すでにあらかじめ破綻している——という思いによって、裏打ちされてもいたのである。「非常時」にもっぱら人間外のものたちとの出会いと交情を描いた秘境探検物語は、解放と共同性実現という同時代の夢に、まっこうから幻滅を対置していたのだった。

これらの作家たちとその作品が集中的に再発掘され、積極的に再評価されるようになるのは、一九六〇年代末

から七〇年代前半にかけてのころである。小栗虫太郎の『有尾人』にはじまる秘境連作は、『人外魔境』という表題の下に一冊にまとめて復刊され、橋外男の代表作や国枝史郎の秘境小説も、ふたたび脚光を浴びることになった。戦後民主主義の空洞化や、高度経済成長にともなう自然破壊、生態系の危機の顕在化が、滅びた世界であると同時に隠れた生存の世界でもある秘境への関心をかきたてたことは、容易に想像できる。だが、いまはそれが問題なのではない。じつは、一九三〇年代後半の秘境探検文学は、敗戦によって断絶したのちに戦後二十年を経て復活した、というわけではないのである。ほとんど中断することなく脈々と、この流れは生きつづけてきたのだった。夢とならんでロマン主義のもうひとつの大きなモチーフである幻滅を、日本の戦前・戦中から戦後へと引きついで表現者の代表的なひとり、香山滋かみやまだった。

2. 新人類と古生物

一九四七年生まれの香山滋が作家として登場するのは、一九四七年春の第一回宝石新人賞によってである。戦後初期の大衆文学メディアとして大きな役割を果たすことになる雑誌『宝石』が初めて企画したこの懸賞で、山田風太郎、島田一男ら七人の入選者のひとりとなったのが、

香山滋だったのだ。入選作『オラン・ペンデクの復讐』は、同誌四七年四月号に掲載されて大きな反響を呼び、翌四八年一月には続篇『オラン・ペンデク後日譚』が、さらに一年以上を経た五九年一月に『オラン・ペンデク射殺事件』が、いずれも同じ『寶石』に発表された。

オラン・ペンデクとは、スマトラの土語で「小さな人」を意味する、とされている。日本が支配権を握っていたジャワ島で政府に委託されて研究を行なっていた人類学者、宮川博士は、敗戦直後、住民たち（「土民」）の襲撃に会い、帆船でスマトラに逃がれた。現地の行政当局の厚意で滞在を許可された博士は、早期に帰国する手だてを求めると同時に、そこで、かねてからの宿願を果たす機会をねらうことになる。この地方では、十数年前に、オラン・ペンデクと呼ばれる未知の人類、あるいは猿人が射殺されたことがあったが、それが猿か人かはまだ決着がついていなかった。宮川博士は、みずからオラン・ペンデクを捕え、この問題を解明しようと決意したのである。——物語は、数多の困難を経て博士がついにオラン・ペンデクに遭遇し、実物を研究した結果を、帰国後はじめて学界に発表する場面から始まる。

会場は異常な興奮と緊張につつまれている。「というものは、もし宮川博士の今日の発表が正当に学界にうけ入

れられることになれば生物進化学説はその失われた連鎖の一環をプラスするであろうし、また我々人類は我々の同胞としてのさらに新しい人類の一種族をこの地球上に迎えることにもなるからである。新たな人類の発見ということは、世界が常に夢みて、幾度か胸を躍らせ、幾度か失望し、しかもなおこの見果てぬ夢を捨て去ろうとはしない、それは根強い執着なのである。あたかも不老不死の靈薬を求めて熄むことを知らなかったあの史的情熱となんら異なるところのものはない。そしてこの情熱がケーニヒスヴァルトをして直^{ホモ・ペキネンシス}立^{ヒテカド・ロイツ・エ・レタス}猿人を発見せしめ、ズダンスキーをして北京人類を発見せしめたのであった。」しかも、今回の発見は、すでに何百万年も昔に消滅した存在の化石ではなく、現に生きている新人類の出現なのである。不自由な足の歩みを助手の石上博士に助けられながら登場した宮川博士は、ついに大人十一、子供四、計十五のオラン・ペンデクを捕え、飼育観察したいきさつを報告する。それは疑いもなく、猿ではなく人だった。

宮川博士が捕えたオラン・ペンデクたちは、三ヶ月ののち、突然、兇暴性を発揮し、助手のひとり殺害して、森の奥へ集団で逃げ去ってしまった。それを追った博士たちは、ノアの洪水を思わせるような大洪水に遭い、そ

の中で今度は、鰓えらをもった新人類を発見した、というのである。だが、オラン・ペツテ（沼の人）とみずから命名したこの第二の新人類について報告するうちに、博士の体調は急激に悪化し、ついに五体が硬直して、ミイラのようになったまま壇上で絶息する。探検の途上で咬まれた巨人蟻の毒が、じわじわと全身に及び、いま最後のとどめをさしたのである。それを知っていた博士は、意識して時期を測り、劇的な最後を壇上でとげたのだ。死に行く博士の胸には、オラン・ペンデクが前額部中央にもっているという紅ばらの花形の赤痣あざが、証拠として移植されていた。

——じつは、物語はむしろここから始まる。博士の死後、助手の石上学士は、博士の遺志にそって一人娘の旗江と結婚し、研究のうえでも博士の後継者として暮らすことになる。一年ののち、故宮川博士の親友だった古生物学の泰斗、横尾博士の死が報ぜられ、その夜、石上は忽然と姿を消したまま、ついに再び帰らなかつた。傷心の旗江のもとへ、ある朝、差出人の名前のかわりに紅ばらの花型がこぼれるような赤さで描かれた分厚い封書が、外国の消印で届けられる。

それは、夫、石上からのものだった。石上は、じつはオラン・ペンデクのひとりだったのだが、何百年かに一

人か二人の割合で生まれる痣あざのない子供だったため、風習にしたがって、やはり痣がない双生児の弟とともに外界へ捨てられたのだ。宮川博士に拾われ、旗江と兄妹のようにして育てられたかれは、大学を卒業したのち博士の助手として働いていたが、訪ねてきた双生児の弟によつて自分の出生の秘密を知り、ひいてはまた人間がオラン・ペンデクにたいして行なっていることに絶望的



な怒りを感じるようになる。ひそかに復讐を誓ったかれは、弟によって故郷から取りよせたうづばかずらの一種、ネペンセス・プルプレアの毒を博士に盛り、その効力を巨人蟻に咬まれたためと思ひ込ませるのに成功する。横尾博士の死もまた、石上の復讐だった。「ではさようなら。私の愛する日本の妻、旗江よ、私は永遠のお別れを告げてこの悲しい手紙を終る前に、ひとこと告げておきたい！」と、石上はつぎのように旗江に呼びかける——「私たちオラン・ペンデク一族は、宮川博士が偶然大洪水に流されて発見された断崖の陰、テラ・インコグニータ〔未知〕の地に、洪積世の昔より何ものにも発見されず、しずかに生きつづけてきたのだ。およそ一世紀前、死火山フェルンダ・ガルーの復活を予知し、難をのがれて現在のロカンの地に移住したのだが、私たち民族の悲劇はその時から始まった。ひとたび文明人の眼に触れたが最後、彼らは飽くなき貪婪をもつて、私たちを世界の好奇の眼の前にさらけ出さずにはおかない。そのためには彼らは手段を選ばない。〔……〕私たち同族は文明を知らない。文化果つるところ、人々は、霊も肉もまるはだかである。大自然はその自然に無条件に同化するもののみを抱擁する。私たちは疾病も、饑餓も、希望も、失意も何も知らない。晨、野草の実を炊き、夕、沼湖に魚介を掬う。

夜、男は蘚苔の床に葉笛を吹き、女は乳房に月光を浴びる。言語は持つが、文字はなく、智性は生活の方便に費すが、いつさいの形而上の問題には無智にひとしい。私たちの平均年齢は三百歳であり、死は眠りの延長にすぎない。デンドロビウム・イムベ（蘭）の搾り汁は女をいよいよ美しくし、イサリア・ルブラ（茸）の胞子は、男の夢をかきたてる！／＼この美しい集団生活を送る種族を、文明人はあらゆる武器をとつて、世にあはこうとする。彼らはそれを学術に藉口するが、その本心は醜い虚栄と名誉欲なのだ。もしそれが新人類探究の止むに止まれぬ欲求本能であるというのなら、私は、そんな本能を軽蔑する。幾多の美しい民族がその毒牙にかかつて滅ぼされたことか？〔……〕

処女作『オラン・ペンデクの復讐』以来、香山滋の作品の大半が、文明人の目のとどかぬ秘境にひっそりと暮らす未知の生きものや、滅亡したと信じられている古生物や、まさに滅びようとしている動植物との、さまざまな接触をテーマとして描きつづける。第一回探偵作家クラブ賞を受けた第二作『海鰻荘奇談』（四七年五月）では、一八四二年に長崎出島で印刷されたシーボルトの『日本博物誌』の記載を手がかりに主人公が二千フィートの海底から発見した一種の電気ウナギが、殺人に利用

される。この未知の新種は、ここではいわば道具として登場するにすぎないが、その一方、重要な役割を果たす主人公の息子は、じつは、主人公が中国の奥地で水生動物分布状況の調査を行なっていたとき知った「土匪」の娘を母として生まれ、そのさい発見された七色の彩も美しい新種の鯊サメにちなんで、鯊のラテン名「ゴビオ」を漢字にした五英雄という名前をつけられている。長篇第二作『ソロモンの桃』（四八年九月―四九年五月）では、「きわめて稀有の獣であるため、十四年前に、たった一頭捕れたのが最初であり、その後は絶えてその足跡すら発見できずにいるという世界的な珍獣」たる「大バンダ熊」の棲息する中国西域から、これまた存在そのものがまだ確認されていない幻の「印度フリス・レイ・ディクス獅子」が出没するカシミールの辺境にいたる一帯が舞台となる。だが、地理上の僻遠の地や、稀少な生物たちは、ただ単に物語に新奇でオカルトじみた効果を与えるためにだけ登場させられるのではない。それらは、いまあるような文明と、それを築きあげ拡充しようとしつづける人間とにたいする、明確な反措定として描かれるのだ。古生物たちは、滅び去ったものも秘かに生存しつづけるものも、それを滅ぼす文明を告発するものとして姿を現わし、未知の新人類は、いま知られている人類が窮極の人間のありかたでは

ないことの生きた証言として、文明人によって発見される。もはや手遅れでしかないこの発見と告発は、香山滋の作品世界のなかで、つねに、新たな解放や共同性の実現に向かつてではなく、別離と、裏切りと、破局と、かいまみられた別世界そのものの最終的な消滅とに向かつて、なだれ落ちて行かざるをえないのだ。

3. 滅びへの憧憬

死火山フェルンダ・ガルラの再生を予知して故郷の地を棄てたオラン・ペンデクたちは、ようやくスマトラのロカンに安住の場を見出したかに思われた。しかし、日本人の妻のもとを去ってそこに帰りついた石上が目にしたのは、葉笛を吹き月光に浴あびみする仙境ではなかった。油田開発の鉄道工事が、すべてを破壊していたのである。その地をふたたび棄てていずこへともなく移住していった同胞を追う石上と、夫の行方を探し求めようとする日本人・旗江とを軸にして、続篇『オラン・ペンデク後日譚』は展開されていく。ついに夫と再会した旗江は、だがしかし、かれとともに生きるためには、ひとつの致命的な決断をしなければならぬ。日本人であること、いや、人間であることをやめて、オラン・ペンデクの一員と化し、オラン・ペンデクの子孫を生むひとりの女性と

なる決意を、ついにかの女はかためる。短篇「心臓花」

(五〇年四月)の主人公は、そこまでは行けない。かれは、アマゾン支流のひとつ、アロヨ・トルカーサが大湿原地帯のなかでぶつりと消えるあたりの、矯木紅樹の茂みの下に、心臓の形をした花がいくつも咲いているのを発見し、それが疑いもなく人間の心臓そのままに生きていることを確信する。そしてかれは、これがひよつとすると未知の人類のひとつではないか、とまで考へる。「人は現在在るがままの形態をもって、進化の絶頂にあるものとして自負し礼讃する。／そのことに、いささかの疑念を差し挿もうともせず、(神)をすら人態化した形態の中に包含して、その安易さの上に満足している。／だが、僕は疑う。／人類は果して、この地球上に、我々が自ら代表する(人科)以外には存在しないであろうか? もっと美しい、もっと高等な人類が、存在しないであろうか?／もっと美しい——とは、我々の美の観念でもって判断することの出来ない、むしろ我々から見て醜であつても、その種族の間でそれが美の至上形式であると認められるところの限られたものであつても一向に差支えなく、また、高等な——とは、文化や社会制度を無視しても、千年の寿命を享受し、どのような悪条件にも適応して生存し得られる強靱な肉体を持つことであ



つても差支えない。／他の遊星のことはいざ知らず、この地球上のいづこかに、そのような意味で「進化」した、「進化の絶頂に達した」未知の人類が、生存しないと誰が断言しよう。」

これほどまでに別の人間の可能性に思いを致すことができたはずのかれも、心臓花をじっと見つめるうちにその無気味さに圧倒され、思わず発砲してしまう。たとえ

未知の存在の独自の価値を認め、その生存の正当性を理解することはできても、その存在とともに生きることは至難なのだ。旗江がオラン・ペンデクとともに生きる決意をすることができたのは、もちろん、オラン・ペンデクが既知の人間と容姿においても生活形態においてもきわめて似通っていたからだろう。その意味で、香山滋の代表作のひとつとされるべき短篇『妖蝶記』（五八年一月）は象徴的である。——四十二歳の古生物学者、曾根のもとに、ある日、外モンゴル南ゴビのネメゲトウ盆地から重要なものを届けに来た、というひとりの男が訪れる。ジュラ紀の地層で占められ、化石の宝庫であるその地を、ソ連の探検隊が調査していることは、曾根も知っていた。それどころか、参加を切望して果たせなかつた曾根に、探検隊長は、曾根が専門とするアンモナイト化石を贈ると約束してくれていたのである。勇躍して迎えた使者がたずさえてきたのは、だが、化石ではなかつた。粗末な籠に入れられた見ばえのせぬ一羽の蝶にすぎなかつたのだ。失望した曾根は、すぐに焼きすててしまえ、と女中に命じる。しかし、うったえるような蝶の眼をみて同情した女中は、ひそかに庭の温室に蝶を放してやる。花開いていたウツボカヅラの茂みに身をよせて、蝶は元気を回復する。物語は、この蝶が人間の女の姿をとって曾根

と愛しあう、というストーリーで展開していく。人間の妻と蝶の愛人とのどちらかを選ばねばならぬ決断のまえに立たされたとき、曾根は、パピと名づけていた蝶に、故郷のネメゲトウに帰ってくれ、とたのむ。心変わりを知つたパピは、いつさいの秘密を曾根にぶちまける。自分たちは、ジュラ紀から生きのびてきた一族で、ジュラの花、ペネンシス・ジガスによつてのみ生きてゐるのだ。その花が、ついに絶滅し、いまではただ一カ所、曾根の温室にしか存続していない。かれがウツボカヅラとして愛育しているのがそれだ。自分は、なんとかして腹の卵を産み、幼虫が死に絶えないようにするために、曾根を愛したふりをしてきただけなのだ。真相を知つて逆上した曾根の目のまえで、下男が放つた火に焼かれながら卵を産みつづけるパピの姿に、かれは思はず顔をおおう。人間世界の外からやつてきた未知の生きものたちは、こうしてほとんどつねに、人間によつて裏切られ、滅びの運命に身をゆだねざるをえない。ほとんど唯一の例外が、オラン・ペンデクの世界に入つていった旗江なのだが、おそらくこれは、香山滋の作品の人間たちのなかで、かの女だけが女性であることと、無関係ではないだろう。ともあれ、根本的に交流不可能なふたつの世界の関係は、やがて香山滋の作品に、さまざまな妖精たちを登場させ

ることになる。『キキモラ』（五二年十一月）、『海から来た妖精』（五三年八月）、『ネンゴ・ネンゴ』（五三年十一月）などのメールヒエンでは、もはや、人間外の存在たちは最初から異次元の世界の住人として固定されてしまっている。かれらが人間界にやってくることはあっても、人間界からかれらの世界への道は、オラン・ペンデクの場合とは違って、そもそもはじめからありえないのだ。人間外の存在は、それゆえ、いまほどのような愛らしい姿をとつていようと、窮極的には、人間界をおびやかす外力へと転化しかねない。一九五四年にかれの原作によって映画化された『ゴジラ』（東宝映画、五四年十一月三日封切）と、その続篇『ゴジラの逆襲』（五五年四月公開。怪獣アンギラス登場）は、核実験によって目ざめた原始恐龍の姿をとつて、自然が圧倒的な外力として襲いかかってくる物語にはかならない。

香山滋の空想の世界は、かつて国策による共同体の創出を描いた諸作品に抗して夢ではなく幻滅をよりどころとした一連の作家たちの仕事をうけつぎながら、この幻滅をさらに破滅にまで押しすすめたのだった。破滅のSFは、もちろん、めずらしいものではない。だが、香山滋の世界にある破滅は、人間外の存在への哀切きわまりない憧憬と挽歌と、人間にたいする切実な自己告発によ

って裏打ちされている。けれどもこの憧憬と挽歌と自己告発は、それをたずさえて人間外の世界へと入っていく道を、旗江の一例を除いて、ついに見出すことができないのだ。そこへの道を見出せぬままいだかれる想いは、現実の自然保護運動においてと同じく、文学表現のなかでもまた、道をふさぐ障害物を現実のなかに発見しそれと対決しないかぎり、自然を超現実的な彼岸のなかに閉じこめてしまえばかりか滅びへの憧憬と容易に境を接することができるのである。

（いけだ ひろし・京都大学教員）

研究余滴 象徴主義 1

序章 象徴主義は死んではいない

山村嘉己



ヴェルレーヌ
(ラジュネスのデッサン)

1

象徴主義はその使命を終つて終息した一つの文学流派ではなく、現在もひきつづきなおその影響をわれわれの上に及ぼしている一つの思想的風土であるという考えから、わたしはこの論考をはじめたい。

この考えはとくに目新しいものではなく、たとえば、加藤周一氏はすでに『現代世界文学講座フランス編』（新潮社・昭和二四）の「象徴主義的風土」なる章の冒頭に、

（文学史的な流派、あるいは運動あるいは少なくとも傾向を同じくする詩人の一団としてかなり明らかに定義される象徴主義は、第一次世界大戦によって葬られた。）

しかし、文学史の上で象徴派がその生命を終わったときに、象徴主義の真の光栄ははじまるのである。象徴派最大の詩人は戦いのさなかに「若きバルク」をもつて活動を開始し、その厭倒的な影響力をふるいはじめた。ヴァレリの孤独な存在は、象徴主義の歴史を逆説的にする。

二十世紀に現代の問題として象徴派を論じるものは、文学史家の整理をいくらか混乱させるようにポー、ボードレー、マラルメ、ヴァレリの純粹詩の發展の過程として象徴主義の歴史を理解する者が多い。それは流派でも世代でも、単純な影響の連鎖でもない。単に抒情詩の世界に限らず、一般に精神の現実にたいする態度・認識と表現とのある方法、美学の一体系を暗示する何ものかによって他から區別される精神の系譜である……(同書122-123ページ)

と、明確に表明している。純粹詩の系譜をとくに強調し、美学的な姿勢をつよく浮き上がらせている点を除けば、ほとんど間然するところのない指摘である。

加藤氏自身も認めているように、(象徴主義という言葉は、純粹に文学史的な観点を離れる瞬間に、忽ち多くの解釈を許すものとなる)のであるから、わたしはここに、ヴェルレーヌとランボーに集約されるブルジョア社会への意識的な反逆という、文学者の対社会的な姿勢の問題、それと絡み合う詩の言語にたいする新しいアプローチなどをつけ加えて考察をつづけて行きたいと思う。もともと、ヴァレリの純粹詩を(音楽から自らの財産を奪

い返す)試みと規定する考へには詩の技法を問い直す意識も十分に見られるが、十九世紀末にはもつと多くの立場からの詩語、詩法への反省があったので、そのことをより広く扱うことはぜひとも必要なことと思われるのだ。ここで同じく、わが国の論者のなかで、象徴主義の現代的意味をつよく論じている例をもう一つ紹介しておきたい。それは平井啓之氏の『ランボオからサルトルへ——フランス象徴主義の問題』(清水弘文堂・昭四三)である。氏はこの中で、ランボオ、ヴァレリー、ブルースト、サルトルの四者のなかに見られる象徴主義的世界観にふれているが、とくにその序でつぎのように述べている。

《元來、フランスの象徴主義文学とは、狭義には、ルコント・ド・リールやジョゼ・マリヤ・ド・エレディヤたちの高踏派の詩家たちの後を承けて、ボードレーを直接の師と仰いで一派をなした、前世紀末の一群の詩人たちの文学傾向を指すものであった。我が国に上田敏の『海潮音』などが夙く伝えた象徴派の概念は勿論このようなものであった。しかし第一次大戦後、ヴァレリー、クロード、ジイド、ブルーストの仕事の意味が明らかになるとともに、今一つ広義の象徴主義的文学の概念が現代文学の把握のために是非必要

となつて来た。それはポーとネルヴァルとをふくめて、以上に述べた四人の廿世紀前半を代表する巨匠の仕事をも包括する、精神的な意義のふかい概念である》

そして氏はサルトルまで取り上げたのは、かれは象徴主義の作家ではないが、かれの説く実存主義のはらむ諸問題が多くの点で象徴主義のそれと本質的なかかわり合いをもつと確信しているからだと断じている。これまた名言であるが、わたしはさらに問題を拡張して、そもそも象徴主義はその狭義の象徴派の『宣言』に見られるような浪漫主義への反対のものではなく、むしろ、浪漫主義の深化したものと考えている。それは浪漫主義は結局、市民社会の成立とともに生じたその社会の基本的な思考の表現であり、市民社会——それは資本主義社会ともほぼ同一であるが——の進展とともにその姿を変えてその質を変えて進んできたものであつて、現代のわれわれもまたその社会の一員であるかぎり、その基本的思考から外れることはできないと考えているということである。歴史は姿を変えつつわれわれのうちにも貫通しているのであつて、象徴主義の歴史をひもとくことは、そのままわれわれの抱える現代の諸問題を考えることに他ならないのである。

2

フランスにおいても、この象徴主義のもつ現代性については多くの批評家が言及している。とくに注目されるのは、G・ミシヨールの大著『象徴主義の詩的使命』（一九六六）である。その結論でかれはつぎのように宣告する。

《象徴主義とともに、ちやうど精神分析学によるのと同じように、無限の地平が開陳される。アンドレ・ブルトンの誓いによれば、一つの新しい世界が生まれうるのだ。そのためには、たしかに、すべてが混乱にすぎず、人間が人間を、金の力で、機械の力で、古い原理で圧迫している世界の物的条件を変えねばならないが、それだけでは不足である。さらに夢を妨げているすべての大きな垣根を取り払い、苦悶する世界に詩を、それがごつたにかかえこんでいるすべての残滓、潜在意識、欲求、もう一つの世界の断片的な破片などともに入り込ませることだけでも十分ではない。人間をこのもう一つの世界と結びつけ、人間の根底から真に原始的な魂を湧き上げなければならぬ。直観的は、前論理的な、類推的な、そして偉大なりズム、偉大な

短評募集!!



短評を書いてみませんか？

最近一年間に発行された本の中で、自分がこればぜひ人にも勧めたい、または、強く印象づけられた本の短評を原稿用紙(四百字詰)二、三枚に。

★ジャンルは自由、締切は毎月末。

★連絡先 千565吹田市千里山東3・10・1

関西大学生協同組合本部3F組織部内
『書評』編集委員会

☎38719998 (直通)

☎38811121 (内線 4821)

イメージ、創造の象徴に自然に合致する思想の啓示的な重要性を理解せねばならないのだ。しかし、その思想を純粹な状態で復元することが大切であり、それには厳格な訓練によってのみ到達できるであろう。そのためにわれわれに必要なものは、ただたんに物質的な革命、詩的な革命だけではなく、すでに象徴主義者たちが予感していたような、真の精神的な革命、統一への回心である。詩と科学を和解させること、思想と行動の合一を再発見すること、それは先ず人間の統合、意識と無意識の合一を再発見することである。それは人間のもつとも根源的な能力、原始的な感受性、類推

的な思想のすべてのあらわれを解放することである。なぜなら、根本的な直観のなかにこそ、象徴が真理のすべてではなく、すべての真理の萌芽がそこにあるのだから……」(同書611〜2ページ)

かくてこそ「詩は知識人たちの無償のお遊びであることをやめて、実効ある導きとなりうるだろう」と、かれは結論してこの書を閉じている。つまり、詩は世界を復源する重要な武器であることを再認するように奨めているのであって、この立場に立てば、現代社会の諸相を近代思想の積年の悪弊の結果としてとらえ、象徴主義はそ

の解決を求める大きな思想的態度だと考えることはむしろ当然であろう。

一方、このような世界観における象徴主義の現代性とは別に、その詩的運動としての継続、発展をダダやシュール・レアリスムに見出そうとする人々もあり（たとえば『象徴主義——マラルメからシュールレアリスムまで——』のA・M・シュミット〔白水社・文庫クセジュに翻訳あり（昭三四）〕は、《彼ら（シュールレアリスト）は精神分析という新しい方法で強力に武装して、熱情とそれまでにはみられなかったような細やかな気づかいとを示して、彼らの無意識の森を探検する。彼らは機械文明の詐欺行為によって死にかけている墮落した世界のなかに、魂の言いがたい真実を氾濫させることによつて、人間を全的に解放しようとするものである。……彼らの反抗は一九三九年まで荒れ狂い文学をはずかしめる……しかし、その反抗が好意的に受け入れられていることを知り、自ら《サンボリスト》たちの発見を補足しながら、独創的な書き方を生み出し、芸術家たちには新しい奇異な美学を教えた……のだと理解する。つまり、文学となることを受諾した》と解説している）、又、フランス自身だけではなく、従来にはないほど多くの影響を世界の他の国々の文学に与えていると考える人々もある。

（たとえば『象徴主義文学』を著わしたH・ペール〔白水社・文庫クセジュに翻訳あり（昭五八）〕は、ドイツ、イギリス、アメリカ、ロシア、スペインなどにも及ぶその拡がりを概説し、《象徴主義の研究は比較文学的、比較芸術的なもの》とならざるを得ないだろうと述べている）。

3

順序としては逆に、象徴主義の現代へのつながりを考察したが、ここでその源流に遡つてその特色を確かめることもまた重要であろう。今回はもっぱら資料に基いて論旨を展開しているので一、二の例証をあげることから始めたい。

まず、常套的な手段だがラルース大辞典をひもといてみよう。

《象徴主義は、一八八五年に明白な姿を現わす以前、およそ二十年にわたつて拡がり始めているが、それは何人かの人々のなかに新しい傾向となつて見出されるしかなかった。この傾向は実証主義と、科学の進化に自らの運命を結びつけていた文学への対立者の姿をとる。……象徴主義は常識と科学的精神への反対を表明

し、分ちがたい総体（《自我》と世界）を積極的にも消極的にも経験しようとする。……そのような態度をとりながら、その原則的な観念論にもかかわらず、かれらは自ら現実主義者と称するものたちよりも、もっと現実主義者となっている。事実、かれらは生の複雑な現実をぶちこわすことを拒絶しているのである。

かれらにとつては、世界は象徴の集まりであるが、その象徴とはもはや《抽象的な思念に代置されるイメーヂ》を意味するものではない。象徴は人間によつて見られるものではあるが、自らを中心として考える人間によつて見られるのではなくて、物によつて見られるのと自らを感じる人間によつて見られるものなのである。この《象徴》という語の価値の拡大は、c. h. ポードレルの「万物照応」という詩のなかで、一八五七年にはじめて示される。

《人間は象徴の森を経て　そこ（自然）をうちすぎ
森は親しげな眼差で　人間を見まもる》

この解説者はこのように説明しながら、その系譜としては遠くプラトンから、十六世紀のリヨン派の詩人たち、ドイツ浪漫派のヘルダーリン、ノヴァリスなどを挙げている一方、真の象徴主義の祖は、アメリカのポーの影響

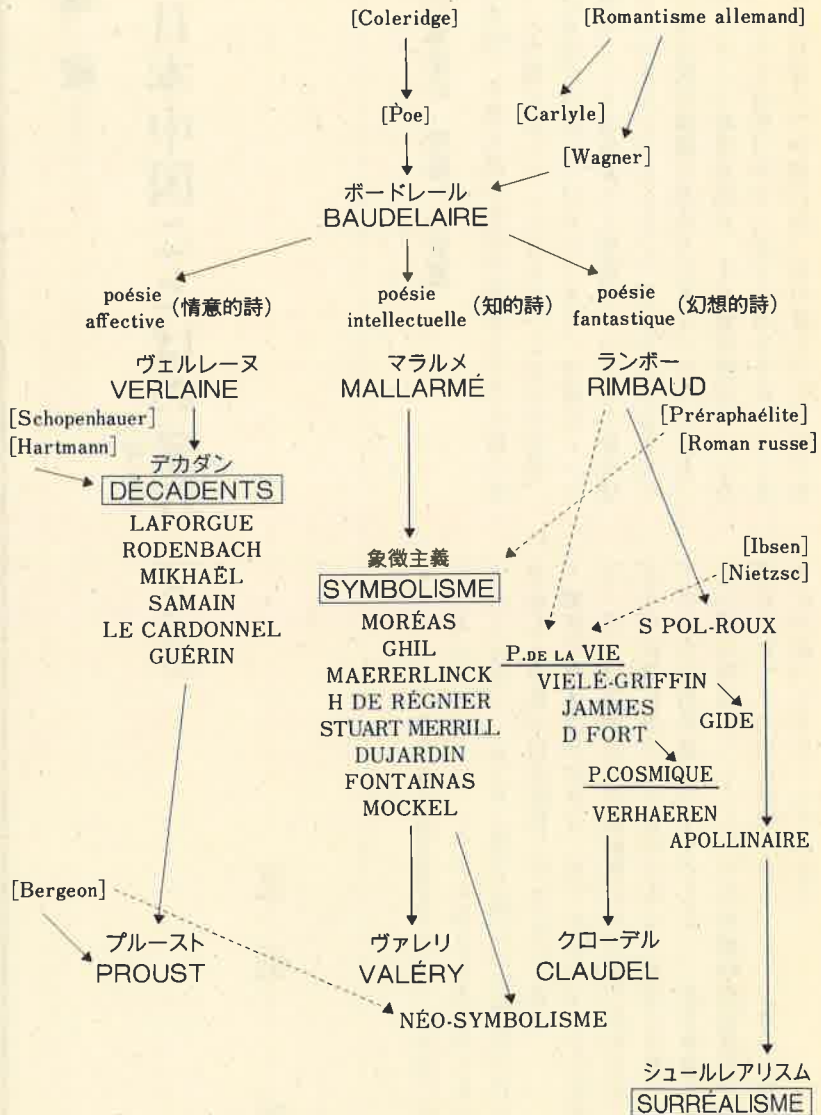
を受けたポードレルに見出されるとし、そのなかに見られる二つの傾向、一つはいわゆる象徴主義といわれる観念性（永遠の美の探究）、一つは頹廢主義（人工性と悪への興味）を指摘しつつ、結果として、《新しい空間として世界と同じくらい広大な深奥なる魂》を発見したと告げている。

この新しい傾向がマラルメ、ヴェルレーヌ、ランボーを経て一八八五年の若い詩人たちの象徴派グループに引きつがれたとラルースは説明しているが、これはすでに紹介したG・ミシヨールの本の中でさらに明快に次頁のように図示されている。

今回は大ざっぱな資料の提出に終つたが、次回からはそれぞれの細部について、できるかぎり実作の紹介を含めて考察を進めるつもりである。わが国ではこの種の試みは少なく、先達の乏しい困難な道となるだろうが、読者の協力——つまり反応をえることで良い結果を期待したい。

（やまむら　よしみ・本学教員フランス文学科）

PRINCIPALES INFLUENCES ET FILIATIONS
(主要な影響と系譜)



— 連載 —

日本中国ことばの来往ゆきまき

その37

芝田 稔

中国四〇年来の“呼称”の変遷

“人民の中国”“中華人民共和国”が誕生してから四〇年は過ぎた。この間に新しいことばと古いことばの交替、語彙の消長変化が目紛しく行われてきた。中国にとつて社会主義建設という未曾有の大実験が、こうした言語現象を促したといえないこともない。何しろ政治上の全ての実験は、常に試行錯誤を求めて止まないからである。新しいスローガンや時事用語が、その都度創造されるのであるが、それらの掛け声が一応その役目を終つてしまふと、もうそれはいつの間にか、次の新しいことばに席

をゆずり、大地の底へ消え失せて行く。この四〇年か、五〇年ほどのうちに——こんなにも多くのことばが生まれては消え、消えてはまた新しいのが生まれる——目紛しく語彙が消長変化してきたのである。

筆者は中国語を学びはじめからちようど五五年になつた。思えば中国語彙の激動期の中で育つたわけで、またスローガンや時事用語はいうまでもない。最も普遍的な社交上の相互呼称についても、その時期の政治情勢に大きく左右されてきたのが歴然である。ここではその軌跡を大まかに辿つてみることにしよう。



中華人民共和国は一九四九年一〇月一日に誕生した。まず五〇年代前半にスポットライトを当ててみよう。新中国の国内建設がまだその緒につかないうちに、朝鮮戦争が勃発し義勇軍派遣など戦時一色に覆われていた頃である。その頃の中国は「鉄のカートン」を降したソ連の協力を得ていたので、自由主義国との国交があったのは英仏ぐらいであり、いわゆる「竹のカートン」の向う側に在った。日本にとって、中国は「近くて遠い国」であり、中国に発生するニュースも、米軍の検閲を経たものでなければ、日本に伝えられなかったのである。

その頃中国一般社会での相互呼称は、まだまだ解放前の風習から抜け切っていなかったようで、男性を「先生」「シェンション」と呼び、若い女性には「小姐」「シアオヂエ」、既婚女性には「太太」「タイタイ」と呼ぶのが通常の社交用語であった（『学漢語』一九九〇年二月号『四〇年社交呼変遷』）。だが一方では「同志」「トンジー」という呼称が流行し始めている。しかし、このことばには政治的色彩が強く、そうやたらと誰にでも使えるものではなかった。これを心おきなく使える間柄といえれば共産党員か、青年団員、政府の役人と解放軍の兵士に限られていたのである。

五〇年代後半に入ると、朝鮮戦争はすでに一段落し、いよいよ国内建設に取り組むことになった。そして国民経済五カ年計画へと踏みこんで行く。この頃には政治、思想、経済、文化等のあらゆる領域で「革命」と「反動」ということばが盛んに拮抗対立する情勢が醸し出されて来る。「同志」という呼称が幅を利かして来たのは、その頃からであるが、しかし、それが公民の間で広範囲に使用されると、曾ての政治的色彩も次第に弱まり、一般にも普遍的な呼称となってしまうのである。

この時期になると「先生」や「小姐」「太太」などということばは、ブルジョワ階級の属性を帯びるものとし

て蔑^{あや}まれ、中国人同士の間では新しい罵語として使用された。もし誰かから故意に「○○先生」と呼ばれたりすると、それこそ自分は「革命の隊列」に加わる資格のないことを証明されたことになるし、また反対にうっかり「小姐」などと口をすべらしてしまうと、相手の女性を批判したことになり、交際の呼称の質的变化によって起るトラブルが話題になった頃である。時期は大分ずれるが、筆者も六六年四月三〇日の夕刻鄭州空港において「小姐」と「同志」のもつ意義を、いとも厳しく且つ印象深く、身を以て学んだことである。

この時期には、ソ連や東欧圏から多くの人たちが中国を訪れているが、中国では彼らに対しては「同志」を使い、他の国から訪問する外国人に対しては、外交辞令としての「先生」を用いて、親疎の別を明確にしていた。

最も注目される「文革」時期に入ると、それこそ革命一色に塗りつぶされる。「同志」は普通の呼称であるが、それに替って「戦友」が使われるようになり、「革命」とか階級属性を表わす「無産階級」「貧下中農」「貧農」と農村で少しの生産手段を所有しているが、別に労働力によって生活費を稼がねばならない生活水準の低い中農のこと」などが修飾語として加えられた。例えば……「無産階級革命的戦友們」「プロレタリア革命派の戦友のみ

なさん」「貧下中農同志們」「貧農と下層中農のみなさん」「革命的同志們」「革命的同志諸君」といったものである。

七〇年代後半「文革」にピリオドが打たれ、引きつづき否定のキャンペーン。四つの現代化が政治の中心課題となってきた。「同志」は相変わらず呼称の主流を成してはいるが、これまで職人や労働者の中で用いられていた「師傅」「シーフ、師匠、先生」という呼称が、工場や現場の作業場から一般社会へと流行し、場所によっては「同志」を凌いでいる、ともいわれている。

このほか青年たちの間では……「哥兒們」「ゴルメン、兄弟同志、仲良し同志」とか、また解放軍の部隊の士官に対しては……「大兵」「ターピン」などの呼称が流行してきたようである。

また大衆に向って呼びかけることばも、以前は「同志們」「同志のみなさん」一色であったが、「朋友」「ポニュー」を用いることが多くなってくる。例えばラジオやテレビなどでは……「聴衆朋友們」「聴衆のみなさん」「観衆朋友們」「観衆のみなさん」など。

八〇年代に入って対外開放政策が推進されてくると、色々な政治傾向をもつ外国人が、引つ切り無しに中国へ来る。こうなると「同志」という呼称よりも、外交用語の「ゼントルマン」「先生」や「レディー」「小姐」の方が

よりスマートに聞える。サービスマン業界は逸早く呼称を替えたが、現在では民間にも波及し、社会の名士や文教界での社交用語として、この「先生」「小姐」が復活しているのである。

ところで、昔も今も変わらずに来た呼称もある。それは公職に在る役職者に対する呼称である。「王局長」「李經理」「張主任」等がそれである。ただ注意しておきたいのは、相手が「王副局長」であつたり「張副主任」であつても、面談の時は「王局長」「張主任」と呼称するのが礼儀のようである。何せ「副」フー」という写音は、「正副」の他に「附属」の「附」や「負」「覆」と同音であるため古来忌み言葉とされているからである。

道教研究に捧げた友人の横顔

中国道教の名刹——北京の白雲觀で一九三九年七月から約一年間、道士と共に寝起きして、白雲觀の年中行事はもちろん、道士たちの日常修業の立ち居振る舞いに至るまで詳さに観察するという希有の実地体験をした親友がいた。その彼が七九年六月一日大正大学大学院での講義中に倒れ、同一九日に六三才で不帰の客となつた。道教といえは今日世界的に注目され始め、その研究も盛んになって来たようであるが、彼は四〇年前に道教と

取り組み、あの戦争中を中国民間信仰の研究一筋に、情熱を燃やし続けていた。私は道教については全くの門外漢であり、彼がどのような研究報告や論文を公にしていたかを知ろうともしなかつた。彼が大正大学へ行つてから時折りに中国情報の交換をした際には、手元の研究発表の抜き刷りを送つてくれていたので、相変わらずしばらく一途にやつている、さすがに宗教者であり学者である、と安心もし敬服もしていたのである。

彼の没後一〇年、一昨年一〇月から今年の二月までに『吉岡義豊著作集』全五巻が五月書房から刊行された。この著作集を前にして、彼が白雲觀や東岳廟を実地に探査し、また黄河の黄土高原を歩きわたりながら、大地に深く根付いた中国民衆の生命力の強さを実感するなど、実践を通して道教に迫つてきた彼の真摯な姿が彷彿として来るのである。

吉岡君とは大阪府立T中学の同窓であり、共に徒歩通学で同じ方向から通つていたので、自然近づく間柄となつた。彼はやや反り気味で小股に速く歩くのが特徴だつた。入学当初から已に僧籍にあつたためか、何事にも控え目で節度を守る律儀な生徒であつた。ただ二年生の時に夏休みの宿題の昆虫採取をして来なかつたことがある。博物の教師は、何故提出しないのかを詰つたのだが、彼

は平然とした態度で……「私は殺生はできません」とい
い放ったのである。そういう心の強さの持ち主でもあつ
た。

一九三四年中学卒業後彼は東京の智山専門学校の予科
へ、私は満鉄に就職したので、それから九年後の四三年
九月私が彼を北京の高野山別院へ訪ねて行くまで、お互
いに消息は途絶えていた。

彼が北京にいることを知ったのはその八月私が大阪へ
帰省しての帰り途である。新義州の駅頭においてであつ
た。当時「国際列車」と称して釜山から朝鮮半島を縦断
して瀋陽に至り、そこから北京までの直通列車があつた。
新義州では乗務員の交代や税関検査のため約三〇分の待
ち時間がある。乗客の多くは朝の眠気催しにブラットホ
ームへ出る。私も降りて時間つぶしをしていると、聞き
覚えのある声がある。見るとそれはT中学のF先生であ
つた。今は大阪府社会教育課の主事で、看護婦隊を組織
して「北滿」へ慰問に行く途中中であり、偶然にも同じ列
車に乗り合せていたのである。吉岡君の住所が判明し
たのは、F先生のおかげであつた。

彼は北池子の騎河樓にある「高野山別院」に住んでい
たが、私がいた沙灘の北京大学宿舍からは歩いて五、六
分のところだった。八畳ほどの居間は彼の書庫のよう

もあり、沢山の漢籍はもちろん、彼が収集したという道
教関係の善本や宝巻、さらには神像画や地方の寺院から
集めた護符の類に至るまで、うたか堆く積まれていた。当時の
戦況は太平洋の南から米軍が北上をめぐざして進撃し始め
た頃である。私はその膨大な紙屑の量を見て啞然とした
が、彼は……「いずれ役に立つこともある」などと、暢
気なことをいつていた。

これらの資料のうち、どれほど大阪の滝谷不動へ疎開
させたかは知らないが、一旦疎開してあつたにもかかわ
らず再度北京へ搬入した善本に、彼が虎の子のように自
慢していた『道蔵』がある。敗戦後、いよいよ引揚げ帰
国となった時に、彼は意を決して白雲観の「当家的」道



観の最高責任者のこと」安世霖師にその保管方を願ひ出した。

それは四六年二月頃だったと思う。ある寒い夕方のこと、彼が住んでいた西四牌樓の什錦花園の寓居へ、白雲観の道士たちが、どやどやとやって来た。七、八人もいたのだろうか。その時吉岡君に紹介されたのが安世霖師であつた。吉岡君はあの『道蔵』を安全且つ完全に保管してくれるのは白雲観以外に無いと信じていたからであり、安世霖師とは曾てお世話願つた旧知の間柄であつたからでもある。道士らが各自持つて来た竹で編んだ底の浅い「皿籠」に幾帳かづつを入れ、それを風呂敷で蔽い、大事そうに担ぎ去つて終つた。道士たちを見送つてから……「ああしておけば、今度来た時にはまた返してもらえるからナ」と、自信タップリに語つた彼の言葉がまだ耳の奥に残っている。

彼が自慢の『道蔵』は、三九年七月天津水害に遭い、水浸しになつたものであり、それを北京隆福寺の古書店が入手したことを知つて、相手の言い値で買い求めたというものである。その出処は天津のさる財閥であり、この善本と同じものは北方では白雲観と北京図書館だけにしか無い貴重なものであると聞かされていた。

私が北京で彼と再会したのが縁で、四五年七月私は卒

業と同時に彼の世話で華北交通に入社、わずか一ヵ月半であつたが、八月一日終戦の詔勅を聞くまで、彼と同じ職場で働いた。引き揚げ帰国後、彼は大宮へ行き、やがて大正大学に奉職した。その頃私は国際新聞社にいたので、彼に原稿を求め『清明節雑考』『道教的宗派』の二篇を華訳して『華文国際』（四八年三、四月号）に登載したことがあるし、五〇年「日本道教学会」成立の際には彼の勧誘で、名を連ねるだけの会員になつたこともある。このように私は彼の学問の真髄には触れることなく、従つて彼が日本の道教学研究に与えた影響の偉大さを知ることもなく、ただ傍観的に、気まぐれに、彼の業績のごく一部を嗅いでいたに過ぎなかつた。

吉岡君は多くの同学の士を得て、その業績の粹を公にしてもらった。門外漢ではあるが親友の一人として感謝の意をこめて、生前の彼の横顔を素描し、彼を偲ぶよすがとした次第である。

（しばた みのる・文学部非常勤講師）

同時代を
撃つ 立花 隆
PART 3

■短評■
同時代を撃つ PART 3

立花 隆

講談社／定価二三四〇円
(消費税込)

一九八九年の世界情勢はかつてないほどのテンポとスケールで変化を遂げた年であった。民主化の要求に端を発した六月の天安門事件をはじめとして、年の終わりのルーマニア革命——チャウシエスク政権の崩壊に至るまで、息もつかせぬ勢いでの変化の連続であった。これは一九八五年、ソ連に登場したゴルバチョフ政権の大胆な「ペレストロイカ」と「グラスノスチ」政策の推進に始

まったわけだが、それに勇気づけられ、弾みを得て、東欧諸国でも同時多発的に民主化・自由化への潜在的欲求が暴発し、共産党政権が相次いで倒れるに至った。そして、戦後の東西冷戦の構図におけるシンボリックな存在であったベルリンの壁が東欧に吹き荒れた改革の嵐によって、崩壊したのである。誰がいつたいこの壁の撤去を予測しえただろうか。この劇的な展開を作り上げたのは東欧のほとんどの国において渦巻いた、民主化を渴望する人々のうねりであった。

本書PART3は「週刊現代」の連載コラム「情報ウォッチング」の中から激動の一九八九年分をまとめたものである。本書では、この歴史の大転換期を、事実と定見に基づいて、国際問題・国内問題の両面にわたって、政治・経済・社会のあらゆる領域で、著者持ち前の明快な分析によって大胆率直に論じている。著者はあとがきでこう述べている。「私はしばらく前まで、我々の時代は陳腐化した退屈な時代だと思っていたが、最近では、こんな面白い時代は滅多にないと思うようになった。目の前で、あゝいま歴史が動いていると実感できる時代はそうあるものではない。」と。そして、今や、このうした世紀末の「歴史の動き」というものが、宇宙中継による電波映像とコンピューター・ネットワークとによって瞬時にして国境を越え、伝播するのである。そうして、世界中の目がリアルタイムで見つめているなかで、力となるものは真実であり、権力の嘘というものは白日のもとにさらされるのである。

著者は、劇的な変化を遂げる世界の潮流の中で、我が国では「このよきな動きがまるで見られず、逆に、退行現象が目立つようである。」と

いう悲観的な見地から、日本の政治家やマスコミに対して痛烈な批判を浴びせている。そして、日本の政治システムに疑問を投げかけている。日本の政治システムにおいては、まず選挙区において、バラまき選挙、バラまき政治をやらないと議員になることができない。中央政界に出てきては、それに輪をかけたバラまき党内政治をやらなければ実力者としてのし上がることはできないのである。そして、自民党が多数を握っている日本の政界では、権力争いは自民党内の多数派形成争いとなってあらわれる。そして、政権獲得の必要条件であり、権力抗争における決定的要因となるのは、世論の有無ではなく、党内で多数派を握ることができるかどうかということになっているのである。

リクルート事件というのは、そういう日本政治の体質が「極限」にま

で達したことで生まれたものであり、まさに「現代日本政治をシンボルする事件」であった。日本の政治は、いま本当に深刻に考え直す必要がある。政治改革の掛け声は盛んだが、この根元的政治土壌を改革するのになければ、またいくらでも第二のりクルート事件が生まれてくるのである。

しかし、「政治家はけしからん」と政治家ばかりを責めても仕方ないのである。このような政治土壌・社会風土を築き上げたのは日本人の意識なのである。日本は、一億総中流意識の中で、さしたる不安もなく、平和というぬるま湯につきりきつてしまい、日本社会全体の中に「ひずみ」が出てきているのではないだろうか。

今や、軍事力やイデオロギーで世界にプレゼンスを確立する時代は終わろうとしており、経済力というも

のがウエイトを占める時代に移行しようとしている中で、好むと好まざるとに関わらず、世界における日本の重要度は増してきているのである。そろそろ本気で、「世界」というものさしで考え、日本は大人にならなければならぬのではないだろうか。世界の歴史の流れというものは、同時代において確実に動いているのである。

(政治学研究所・別宮利彦)



■短評■
出ようかニッポン女31歳

山本美知子
講談社／定価一三〇〇円
(消費税込)

人は自分の人生の分岐点をどのようにとらえ、生き方を選択していくのだろうか。また自分の生き方に疑問を抱いたとき、何か精神的に大きな壁におつかったとき、どのように問題を解決していくのだろうか。自分の人生を自分の本音に従って生きるといふ、一見、当たり前のようなことが、時としてとても大きな難題として人の前に立ちはだかることが

ある。今、現在このような壁におつかつていて、何とか突破口を見つけないとあせっている人も多いことだろう。特に「女性は結婚して良妻賢母になること」、「女性は若いうちに結婚してこそ価値がある」という女性に対するステレオタイプ的な見方がまだまだ根強く残っている日本で生活する女性たちにとって、自分の人生に能動的になることがいかに難しいかは想像に難くない。

著者も、年齢で人格が判断されてしまい、性別からくる役割分担にしばられる日本での生活に息苦しさを感じた女性のひとりである。(著者の場合、3年間のイギリスでの滞在経験が、その後の人生観、女性観としてアメリカ行きに大きく影響しているのだが。)型をおしつけられ、その型に無理矢理、自分をはめこまなければ生きていけない日本に疑問を感じた著者は、31歳のとき、婚約

解消を機に「What I want to do? (何をしたいのか)」「What I am? (自分は何者なのか)」「What I need? (何が必要なのか)」の答えを求めてアメリカへ自分さがしの旅に出るのである。

渡米した著者は、教会でボランティアをしたりコミュニティカレッジに通いながら勉強したりするなかで、様々な人種の人と出会い、異文化に触れていく。そしてサンフランシスコの日本町で一枚のポスターをきっかけにその後のアメリカでの生活に大きな意味を持つようになる日本人渡米者組織「のびる会」と運命的な出会いをする。この「のびる会」は、アメリカに住む日本人のための社会福祉を主な活動としており、やがて著者もボランティア活動に参加していくことになる。そして著者はこの「のびる会」で「社会難民」という言葉に出会う。「社会難民」とは日

本で大きな壁におつかり、自分の生き方を見つめ返すために渡米してきた人のことである。著者は自らを「社会難民」と称し、「のびる会」の活動を通して自分を見つめ直し、アメリカに來た意味を考えようとする。

「のびる会」の活動のなかで日系三世人問題、永住権獲得問題など様々な問題におつかりながら「自分さがしの旅」は続くのである。そして帰国してからも著者の「社会難民」としての自覚はそのままで、「在日日本人」「在日社会難民」として「自分のやりたいことをさがし求める姿勢」「自分をみつめる姿勢」を持ち続けている。著者にとって「自分さがしの旅」は終わることがないだろう。

著者が渡米前に経験したような悩みは、今の日本に生活する人なら誰でも（特に女性は）経験するのではないだろうか。壁におつかった時、

どのようなそれを乗りこえていくか。著者は自分の意志を貫いて渡米し、帰国後このように述べている。

「自分で決めて、自分で実行する……責任はすべて自分にある。その思いがときには脱線しそうになる道を軌道修正してくれる。自分の選んだ道だから後悔したくない、光る石に磨きあげたいと貪欲になる。転んでもタダでは起きない精神がつちかわれる。」

「自分で決めて自分で実行した場合、選択した行動は絶対にマイナスにはならない。」

実体験から生まれた言葉だけに力強さが感じられる。

「社会難民」としての自分は誰の心の中にも潜んでいないのではないだろうか。自分の生き方に疑問を抱いたら徹底的に自分をみつめることが大切なのだ。人間である以上、迷いからは逃れられないだろう。しかし、

迷いながらも自分の選んだ道を懸命に歩いていくことができる、そんな自分こそ真に誇るべき自分なのではないだろうか。

著者は、アメリカでの体験をこの本にまとめて「自分なりのサクセス・ストーリー」を書くことができたと述べている。しかし「自分なりのサクセス・ストーリー」以上にどんなサクセス・ストーリーがありえるだろう。私達も「自分なりのサクセス・ストーリー」をめざして「自分さがしの旅」に出ようではありませんか。

（社会学部二回生 李原寛子）



■短評■
精神病を知る本

JICC出版社・宝島BOOKS

定価一、四〇〇円

(消費税込)

私達は日々、自分の意志で考え、自分の責任でもって行動している。そうした主体的な存在として相互に認め合いながら生きている。しかし、このような基本的人権といえる、人間として当然背負うべき権利と義務を剝奪された人々が社会的に「生産」されているのである。その人々というのが、本書に取り上げられている精神病患者、とりわけ精神分裂病と診

断された人々なのである。近代精神

だ。

医学における精神分裂病者の心の動きによると、「精神分裂病者の心の動きは正常な心理をもってしては了解できない部分である。この了解不可能性がそれが分裂病を診断する重要な根拠であって、精神科医が分裂病と診断したということは、その患者の心理は根本的に了解不能」な人間であるとされている。そして一担、分裂病と診断された者は近代に発生した主体としての人間であることを一切、認められなくなる。つまり、「異常者」というレッテルをはられて、一般社会から疎外・隔離かくりされるのである。具体的には、鉄格子付きの精神病院送りとなってしまう、そこでは本人の意志が考慮されることは、まったくなかったのである。そして現代において、「異質」なものとしての精神病患者を隔離・収容しなければならぬという常識が浸透しているの

それではなぜ、このように「狂気」や精神病患者といった存在が社会から疎外・排除させられたのだろうか。それを本書では、「近代が創り出した「理性（＝正常）」がそれ自身としては「理性」であることが証明できないが故に、非理性としての「狂気（＝異常）」を分割＝排除する必要があった」とされている。その証明として、近代精神医学が浸透する以前の社会においては「狂気」は決して「異常（異質）」なものではなく、日常的で受容されるものであった。近代科学の一分野である、精神医学の成立により、「狂気」が我々内部からの理解を不可能にしたのだと述べている。

しかし、本書は以上のような精神医学批判の硬い内容ばかりでもなく、大部分は興味深いものである。第二部の現実の日本における精神医療の

現場に関わる（関わった）人々の発言は、日常から隠れているが故に、非常に刺激的である。精神科医への「精神とは一体何なのか？」を尋ねるインタビュウがある。その中には、精神病Ⅱ精神の異常とは、そのために日常生活を破綻してしまうことであり、治療とは再び「生産する主体」として社会に適応させることであり、精神分析よりも行動療法が効果が高い、といった回答がなされている。

また、かつて精神病院に入り、社会復帰した人々の座談会も入っている。ここに参加した人々は皆、真面目な人々なのだが、「言葉がなくなっていた」とか、「自分の考えが他人に流れ出す」ことに苦しみ、入院する。病院内で「なんでここにいるんだろう」と思われる患者ばかりだった、というのは私達の「常識」を揺がす。また、この話の中で、非常に暗示的なのは、彼らが病気の

呪縛じゆわくから解放できたきっかけというのが、一様に、それまでの自分に足枷あしづかをはめてしまいう性格から、「なるようになる」、「いいかげんでいいんだ」と実感するということであり、その結果、樂觀的に生きられるようになったのである。

さらに、代表的な心理テストであるロールシャッハ・テスト（左右対称のインクの染しよから連想したことを話すことで被験者の心理を理解しようとするテスト）をそれに批判する臨床心理と「挑戦的な」被験者によってテストするという実験的試みも行われているのである。

第三部では精神病患者による表現として詩と演劇が取り上げられている。特に詩の作品には凄味がある。特に、「ホームラン、包んで」は一読の価値があるだろう。この凄さは読んでみなければ解らないものである。

全体的には、近代精神医学が非科学的である、というある種の科学絶対主義に陥ってしまったという印象が強い。個人的には、人間と人間との関わり合い（間主體的出来事）として生じる精神病が科学で割り切れるはずがない、という点から本書には偏り過ぎのきらいもある。しかし、精神病という心の問題に非常に面白くアプローチしている。巻末には、関連するテキストも載っており、分裂病・神経症の理解への指針となる一冊である。

（社会学部？ 回生・川野旅人）

募集

書評編集 STAFF

- 『書評』をつくっていきましょう！
- 興味のある人は生協3F組織部まで
TEL 387-9998 お電話ください。

投稿募集のお知らせ

◎投稿募集

読者からの投稿をお待ちしています。

最近読んだ本の書評、内容紹介、批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表、論文も結講です。

◎投稿規定は以下の通りです。

▼原稿は原則として縦書きで、「書評」誌用の字数、一行二五字、一二行(二五〇字)を一枚と計算します。
▼枚数は自由。(ただし編集上の都合で何回かに分けて掲載することもあります。)

▼原稿には住所、氏名、学籍番号、電話番号を必ず記入して下さい。

▼原稿は返却しません。

▼送り先・問い合わせ

〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生活協同組合本部3F組織部内「書評」編集委員会

☎ 387-9998 (直通)

☎ 388-1122 (内線4821)



編 集 後 記

『書評』第92号をお届けします。

今号から、新編集委員（私も含めて）が加わりました。まずは、本誌の編集作業に慣れることだと思っています。しかし、今までの本誌の路線にこだわることなく、独自の新しい観点からの記事も加えていきたい、と望んでいます。

さて、5月24日には盧泰愚^{ノテウ}大統領が来日しました。その前後にマスコミで大きく取り上げられていた91年問題を中心とし、次号では再び在日韓国・朝鮮人問題を捉え直す目的で特集を企画しています。「国際化」が唱えられている現在ですが、最も身近な外国人である在日韓国・朝鮮人に対して治安・管理の対象としている現状のままでは真に開かれた「国際化」といえるのでしょうか。その辺りのことを深く追求できるように、編集部員一同、努力していこうと決意しています。

そして、『書評』編集委員会では常時、新編集委員を募集しています。編集に関する知識が全くなくても大丈夫です。本を創ってみたい人や、社会に広く目を広げたいなど思っている人は私達と一緒に考えてみませんか。生協本部3F組織部まで、いつでも来て下さい。

「書評」 1990年6月30日 通巻92号

編集・発行 関西大学生協同組合・組織部「書評」編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎388-1121 (内線4821) or 387-9998)
頒 価 250円